

501

156

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁹/₁₀ 10 1 2 3 4 5

始



工 9 42 50/156



抱絕

腹倒

滑

稽

問

答

大正
10 9.24
内交

抱腹滑稽問答目次

一 滑稽學 二

滑稽學校の所在地 滑稽大學試験問題

二 滑稽異名 四

知らぬ顔の半兵衛知つた顔の長兵衛及鳴左衛門ありて亭主右衛門なき理由：：：：：鳴の左衛門尉の理由：：：：：ちやんとおつかあの説明：：：：：お袋の理由：：：：：お多福の譯：：：：：細君の理：：：：：奥様の説明：：：：：山の神の譯：：：：：おはれの説明：：：：：ガキの譯：：：：：金魚落雁の説明：：：：：赤貧の説明：：：：：下田屋の譯：：：：：火の車の義：：：：：ノンキの譯：：：：：小僧の理由：：：：：ヘンチクリンの説明：：：：：珍竹林の譯：：：：：源助の理由：：：：：曲者の理由：：：：：猫ばゞの説：：：：：鼻下長の説：：：：：大鼓の譯：：：：：大鼓持の説明：：：：：胡麻摺の理由：：：：：ジャンコの説明：：：：：瘦ッぼちの理：：：：：疝氣筋の譯柄：：：：：お茶の子さい／＼の説明：：：：：下駄一足の理：：：：：隨徳寺の説明：：：：：一目散の譯：：：：：公の付所：：：：：おとおんの付處：：：：：天麩羅紳士の説明：：：：：上戸下戸の理

ハタチの譯：青二歳の説明：十二分の解：十三里と八里半の看極：三の字の精
 起悪き譯：オツチヨコチヨイの答辯：ヘビレケの説明：ザツケマランの意味：
 ヘナチヨコの譯：オツメケルツポツポツの理由：お茶ツビーの説明：ペラン
 メイの意義：西國するの譯：ちんちんの譯：ヘチマ野郎の説明

三 滑稽字解……………三三

子子子子子子子子の讀方：莫大小の説明：大晦日の字義：目出度の譯：
 破瓜の説明：紳士の字意：吐月峰の説明：岡目八目の解：腐の字の譯柄：泊
 る晒すの答辯：敗北ありて敗東敗西敗南なき理：日と月の相違：時計をツケイと
 讀まざる理：立食とリツシヨク：嘖と云ふ字の起原

四 滑稽文句……………四二

近江泥坊に伊勢を食：箸にも棒にも懸らぬ奴：旅の恥はかき捨て：死ぬるを忠義
 源藏夫婦が五色の息：ソリヤ聞えませぬ傳兵衛さん：二里や三里は傳馬で通ふ：
 やみのよに：お江戸に田無し：白髪三千丈：三更月を踏む：艱難汝を玉にす：
 犬猿實ならざる間柄：奇想天外：男心と秋の空女心と秋の空：親の光は七光：

胸を焦し戀の暗路に踏迷ひ：馬鹿の三杯汁：おたてともつこに乗りたくない：
 木で鼻を括る：オツカ：江戸ツ子のチャキ／＼：お前麻布で氣が知れぬ：死人
 に口無し：何が何して何とやら

五 滑稽人事……………五五

滑稽問答著者先生の容貌風采：著者の生國と本名：辨慶三十餘年の溜涙：デタラ
 目：女に目が無い慾に目がない：駄目：鼻毛を讀む：怒髪天を衝く：鼻の胡
 蹄：口も八丁手も八丁：面の皮を引剥く：腹が狼：雷公と臍：滑稽連と臍：
 臍の宿替：婦人の毛：親のスネの味：膝をかじる息子：戀風：戀の暗路：
 妻君の鹽漬：鬼子：乙姫：眞赤な嘘：魂の入れ替：元老の資格：度膽を抜
 かる：噛めぬ齒

六 滑稽動植物……………七三

野呂馬：野次馬と喜多馬：おてん馬：頓馬とマヌ毛：飄箆から胸：ものうし
 ：兔の角：挺鶴：鳥と卵：五位の鶯：羽のなき鳥：矢鱈の産地：鰻とア
 ナゴ：泥水に住む魚を釣る法：呆れ蛙：弱蟲：トウヘン木：人間ばあしのな

い動物：：海に千年川に千年の動物：：驚板の産地：：やり栗の産地：：金のなる木：
：ホラ落の産地：：喧嘩に花が咲く：：根も葉もない樹

七 滑稽衛生：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 八六

安本丹の効能：：安本丹の製法：：馬鹿に付ける薬：：ハイカラ病：：人目を防く薬：
放屁一發藥三服の價値あり：：自腹と頭割：：片腹痛え：：命の洗濯法：：肩て呼吸：
：櫻や柳の毒：：毒で常に用ゐて差支なきもの：：餘計な世話薬：：吐た口へ牡丹餅

八 滑稽飲食物：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 九三

栗を喰ふ：：海老茶の味代價：：蝦茶の産地：：生蕎麥：：杉森の御馳走：：人間は食
物ありや：：夫婦喧嘩を喰ふもの

九 滑稽珍菓：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 九八

アーメンの製法：：燒餅の製法：：コリー菓子：：夏菓子屋

十 滑稽法律：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 一〇〇

甲女乙某を眼で殺せり刑法の適用：：甲男乙女に脇藏砲を放たれ告訴す刑法の適用：
質の流るゝ理由：：菓子のカルメラとカステラーと貸借關係ありや：：耳を揃へて返濟
するの理由

十一 滑稽相場：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 一〇四

嫁五兩とあるが婿がれの相場は：：裸百貫の理

十二 滑稽器具：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 一〇五

ひょうろく玉の説明：：滑稽汽車の速力：：滑稽汽車各驛起點及終點：：以心でんしん
の仕掛：：手管の製法並に用法：：へな猪口：：お茶ツピーと云ふ笛の製法：：辛棒：
ペラ棒：：禿頭の薬罐は湯を沸し得るや：：爪の火は電燈及洋燈の代をするや：：波は
一束二束と括らるゝか：：物の入れられぬ倉

十三 滑稽宗教：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：： 一一四

南無阿彌陀佛と南無妙法蓮華經とアーメンとは何れを稱へて利益なるや：：馬の耳に念
佛：：なむからたんのうとらやアアア：：無情の風と有情の風：：地獄の人口：：鼻の

十四 滑稽故事

下喰ふ殿……禪學と田樂……三途の川

桃太郎の鬼ヶ島……平氣の平左衛門及土左衛門の來歴……ヒョットコの由來……ペラン
メイの起原……チンブンカンブンの故事來歴……小田原評議の來歴……一二思我、二一
不思我……松浦佐用姫石となり清姫蛇となると云ふが眞實か……馬鹿の起原……海老茶
式部の傳記……熊公の羽織柳原の土手に化ける

天文之部

(計十五則)……(三三)

天は暈か……天の目……天挺舞……雨降りて地固まる……天とう様と米の飯……霰……
三十三天……大雨傾盆……風の味……月の年齢……一年の中に一あつて一日の中に二つ
あるもの……新玉……雷を捉ふ……雷公の名

地理之部

(計十五則)……(三六)

餘所の世界……米其他の國……姨捨山……東京の地名……州名……川の異名……戀の淵
……お茶の水……ハラランダ國……滅法海……見かけた山……妙竹林……喜見城……地獄

の一丁目……藪坂

人事之部

(計五十則)……(四八)

退化……笑門福來……おいしい……スベタ……脳味噌販賣所……頓狂……油賣の故事
……下女の尻……間女……女房づくし……盗の字……眞赤な嘘……通行税……鼻下と目尻
……サンマ以下の人間……七難隠す……鼻垂し巡送り……鼻の字……秋茄子を嫁に喰は
すな……似たもの夫婦……茶人文盲……女房の尻に數かるゝ亭主の面……疊の上の水練
……七轉び八起……再來年……婿八人の名……極の小祿……口の年貢……鼻の字……ボ
ロ買……年を拾ふ……厄介長者……目から鼻……太い奴……頓珍官……甘井養閑藪井竹
庵……風來人……三界に家なし……叔姪の結婚……江戸の敵……土百姓……利いた風……
長松……鬼の首を取つた人……胸に釘……二階で尻……愚痴をこぼす……落膽……烟
に捲く……酸いた男

神佛之部

(計八則)……(五一)

神は上戸佛は下戸か……貧乏神……七神福は着たなり……アツく……不動の火……大
黒とハスト……尊者……わい／＼天王

禽獸之部 (計十七則).....一六〇

珍鴨.....鳥の位階.....サヤ仲間.....木兎は兎か.....ブラックスワン.....人間の鳥.....鳥の言語.....一羽にて千鳥.....かけ鳥.....雀蛤となる.....狐馬に乗る.....狐の一族.....獸類の姓名.....禽獸と植物の配合.....猫は何神の使なるか.....狼の出家

魚介之部 (計十一則).....一八七

龍宮乙姫の艶書.....のみ鯛くひ鯛.....鯉の種類.....鱈の立身.....鯉の山路.....魚類の姓名.....川魚と海魚の大相撲.....同上評判記.....龍宮の官職.....はまぐり.....鯉の鎌倉武士

昆蟲之部 (計十三則).....一九四

米を喰ふ蟲.....守宮の黒燒.....胡麻の蠅.....蛙の歌會.....蟋蟀の斧.....跡藁.....箱入の蟲.....螢の憂目.....油蟲.....蟲の職業.....蟲と人物見立.....蟲の信仰.....フサギの蟲

草木之部 (計十二則).....二〇一

櫻の位置.....花と女の評判記.....木の股から生れた人.....おい蘭の相場.....おい蘭の產地.....馬鹿苔.....使ひ杉.....首ツ竹.....蓮ツ葉の効用.....金カシ.....恥カキツバタ.....一六首蒲

肢體之部 (計十八則).....二〇九

弱り目に祟り目.....目の玉が飛出す.....控へ目.....卵の目鼻.....面喰つた.....泥を塗つた面.....一口物に焼いた頬.....動物から借集め.....牡丹餅で頬を叩く.....べたの譯.....千枚張の面の皮.....折れる鼻曲る鼻.....頭の藥罐.....風を切る肩.....閻魔の抜いた舌.....火を點す爪.....理想的の人間.....壁に耳障子の目鼻

衣食之部 (計十五則).....二二六

禪.....羽織.....スワルトバートル.....海老茶の綻び.....鯉縞.....蟬の羽織.....柳原の幽霊.....ハイカラの種類.....喰つて旨くない物.....喰物になる娘.....リンキの焼餅.....餅でない餅.....餅の數へ歌.....親かうく.....山の芋の饅になる經歷

器具之部 (計十四則).....二三四

お髯の座を掃ふ箒……鼻に掛る眼鏡……豆腐に打つかすがひ……娘を入れる箱……尻毛を抜く毛抜……櫓木に羽が生へる……行平銅の由来……四椀棒……五郎八茶碗……鼻の下を量る物差……尻の帆掛船……口車と腰車……今後の發明品

數學之部 (計十七則)……………(三)

甚助の算法……二日酔……千兩八百十三年……七兩二分……六道錢……八字髯……代議士……最も安直の物……口の八丁に手の八丁……どうして九兩三分二朱……目尻と鼻の下……兎と龜の競争……滑稽大學數學問題……懸直……宿六の損害……地獄と極樂の距離……嘘八百萬事千里

法律之部 (計十一則)……………(三七)

面の皮を引剥く罪……虱の訴狀……五の字の訴へ……查公と呼ぶは官吏侮辱なるや……臍の訴へ……戀の曲者の處分……男の魂を奪ひし女の處刑……不動の拘引……ドテラを打殺せし罪……眞綿も兇器なるや……鴉勘左衛門と種無し權兵衛の訴訟

奇術之部 (計十四則)……………(四)

財産家になる法……美人を振向かす法……美人を引付る法……星を握む法……病氣に罹らぬ法……腹の減らぬ法……大學者になる法……家内を治める法……無錢で新聞を読む法……寝て居て喰へる法……長座の客を返す法……雨天の雪駄で旅行する法……無錢で料理屋に上る法……一文無しの生活法……戀そつもりて淵となりぬる……古元結……百人一首上の句付……同上下の句付……定家卿の醜男……頼爲明鏡分橋面……家の片目……ペイ／＼語の歌……美人天上下落……犬に咬まれぬ禁厭……喜の字の祝ひ……猫眼の對……朝顔晝顔又夕顔……昔の狂歌……貫之の冠……やまと語……鯛の片身……回文の歌……涙の字義



抱腹
絕倒
滑稽
問答

一 滑稽學

一 滑稽學を修むるには、先づ如何なる學校に入りて修業すべきや、其學校の所在地及び授業料の高を問ふ

滑稽學は氣樂な様で中々苦しい學問です、世間から種々の六ヶ敷い難題を持懸けられ、其れを甘く茶化して笑はせるのが目的ですから、一通りの苦學ではとても物になりません、併し切角のお尋ですから、學校の事を一寸お知らせ申さう、先づ洒落小學を卒業して頓智中學で五年の修業、それから滑稽大學に入門するのです。

其所在地ですが、同大學は大笑國滑稽府にあります、東方朔が大學長で、拙者の甥の會呂利新左衛門が教頭を勤めて居ます、生徒は目下八百万人、彌次郎兵衛喜多八などは大學院に入り笑科専攻生となつて居ます、授業料は別段取りません、却つて大學の方

から澤山學資を給與して、餘つたら酒を飲うと旨い物を喰うと勝手次第です、それはどうして學校の經濟が立つかといふと、可笑いだらけで笑つてばかり居るから、自然金が儲かる、笑ふ門には福來ると申してナ、女の生徒ですか、居ますともく、細女命俗にお龜と申す女などはあれで蝦茶式部の總大將です、まア御入學は兎も角も一度往つて御覽なさい、何時でも御案内致しませう。

二 私は滑稽大學へ入門致し度志願に候へ共、其手續は如何致して宜しきや御教示被下度、規則書有之候は、一部御送りを乞ふ

左様ですか、御奇特の事で、滑稽大學へ御入門なさるには、先づ洒落小學、頓智中學を御卒業の證明書が無ければ不可ませぬ、又別に試験の上右同様の學力ありと認定して入學を許可する事になつて居ります、丁度目下生徒募集中で、左記の試験問題を公示してあります、之に答案を附して本欄へ御届けなされば、同大學で調査の上、合格

の者は、更に口頭試験をするさうです。

滑稽大學入學試験問題(筆記の分)

- 第一問 丁稚の名は長松の多き理由如何。
- 第二問 灰殻式部の傳記を詳細に記述せよ。
- 第三問 桃太郎、鬼ヶ島征伐に赴くを送るの辭。
- 第四問 馬鹿の事を與太郎或は三太公と云ふ所以。
- 第五問 劍突山の由來を記せ。
- 第六問 父無川の所在地及び其運輸の便を問ふ。

滑稽
筆記

二 滑稽異名

三 知らぬ顔の半兵衛はあるが、知つた顔の長兵衛もあるか、又鼻左衛門ありて

亭主右衛門無きは如何

半兵衛にはおチヨといふ色女があり、長兵衛にはおトコといふ色女の在つたことは問
 者も定めて知て居るであらう、其半兵衛はおチヨが懐妊し其爲め色々の難澁を生ぜし
 も知らぬ顔で一切構はなかつた、又長兵衛は口癖の様におトコの中の男一匹といふた
 のを見ても其色女の事を始終氣に掛て居たことが分る、ソコで知らぬ顔の半兵衛もあ
 れば、知つた顔の長兵衛もある、次に左右の衛門といふは昔し帝京を衛る武臣の官で
 あつたが、其時は夫婦にて就官し、左衛門の方は必ず妻即ち鼻の方が務める定りであ
 つた、其後段々右衛門即ち亭主の鼻の下が延びて來て、口から隔たるに連れ、權力も
 次第に減じて終に全く左衛門に併合されて仕舞つた、ソレで以後は亭主右衛門が無い
 のぢや、ドーか合點が參つたか。

四 鼻アは女の癖に下へ左衛門尉の官名を附るとは僭上至極なり、其理由如何

「日本の本は岩戸神樂の初より女ならでは夜の明ぬ國」と云へる如く、東海姫氏國たる日本は古來女の貴き國風なり、されば左衛門尉位の官名を名乗りたりとて僭上にあらず、百人一首を見給へ、赤染右衛門、清少納言、和泉式部など官名を稱する女房幾人もあり、それより無能大食の宿祿の癖に、亭主關白の位など、威張る厄介者こそ僭上至極と云ふべけれ。

五 父をチャンと呼び母をオッカアと云ふは如何なる故ぞ

父親は一家の大黒柱にて、妻子眷屬の上に立つものなれば、平素の行爲も成るべくチャンとして居るべき筈のものなり、故に之をチャンと名付、又母親は夜明に鴉がカアと啼けば、直に飛起きて、炊事に取懸るべき筈のもの、故に之をカア様と云ふなり、様の代りに上へおの字を付けおカアとなりおッカアとなる、因に記す夫が妻をカ、アと呼ぶも、鴉が教へ始めし語にて同一の意味、公治長と云ふ人が鳥の聲を聞き分けし、

り以來、鳥と人間との語は往々混淆せり、雞が小虫でも見附けて、配偶を呼ぶ時にも雌は雄を此處々々と云ひ、雄は雌を此處々々か、くと云ふなり。

六 母親の事をお袋と云ふは如何

布袋様は袋の中に唐兒を入れて置いて淋しくなれば其れを取出して遊んで居る、されば懐妊して腹の膨れるを布袋になつたと云ふからには腹は即ち布袋の袋と同じ、其袋の中から出て來る人間なれば母を指してお袋といふのである。

七 私を事を人がお多福と云ひますがどういふ譯ですか

愛嬌の澤山ある福々しい御面相を敬つて御の字を奉つたので、此上もない名譽の事と思はれます、お多福と云ふから安つぼくなるが、御多福の姫君と、御の字へウンと力を入れて呼べば有難く聞えます。

八、肥りたる人でも細君とは是如何

大きな諸侯でも細川と云ふあり、大きな身體でも小人と云はる、奏檜の如きあり、外形の大小により名は下し難し、福羽美静氏の如き貴族員で、起立しても座つて居ると同様のチンチクリンも、歌人仲間では、うし即ち大人と云はれて居る、蓋し細君とは形の大小によりて名けしものにあらずして、家事上の細い事に注意すべき人なれば斯く呼べるなり。

へ九、人の妻を奥様と云ふは如何なる義なるや

妻は米櫃を預かる役目あるより奥の字を用ふるなり、即ち奥の字の形は米を大事に抱へ込んで両手を擴げ兩足を踏張りし姿にせ、妻の一名をフンバリと云ふも是より起りしなげ、されば奥様と云ふ語は上流社會に限らず、車夫馬丁の女房も奥は奥本の、今日物の道理を知れる人々多くなり來りたるも文明の餘澤なるべし。

一〇 裏店の井戸端會議員を山の神と云ふは如何なる理由ぞ

山のかみは裏店のみに限らず、實は奥様の異名なり、いろはのおくやまに就て考へ給へ、やまの上は即ちおくと云ふ謎、して見れば別に輕蔑したる意味にあらず。

一一 わたしには、ちツとも根も葉も無いの、夫れに皆さんが、わたしの事をネ

おはねと云ツてよ、なぜでしよう

皆がおはねと云つても、人さまぐで、意味は皆違う、或は卿には根も葉も無くつても、卿がキー〜キヤツ〜と喧ましく、人の話を根ほり葉ほり聞きたがつて五月蠅から、卿の事をお葉根と云ふ、或は卿はお轉馬に乗り廻つて、其お轉馬が跳ね廻るから卿をお跳と云ふ、或は卿が追羽子の様に飛び上りだから、卿をお羽子と云ふ、どうですおはねさん、ちつとは思ひ當りますか。

一二 小供の事をガキとは如何

小兒を餓鬼と云ふは、菓子などを強請る時叱る詞にて、餓鬼道に落ちたる亡者に比し

て罵る事なりと云ふ説あれども、這は餘り牽強附會なり、實は稚兒と云ふ字を雅鬼と讀み誤まりたるより起りしなり、日本にては漢字の誤讀が其儘一般に通用し來る例甚だ多し鍛冶屋の鍛冶などは、實はタンヤにてカチの音のあるべき筈なし、此類推して知るべし。

一三 家の書生さんが私の事を、金魚落雁だといひましたが、何の事でせう
顔が丸子で赤く、水性の浮氣者だから、それで金魚に見立てられたのでせう、併し落雁と云ふ處から考へれば、キツト痘痕があつて、豆落雁と見違へられる御面相ですナ書生など、いふ者は口の悪いもので、陽は褒めるやうな、其實皮肉を云ふから、増長しては不可ませんヨ、それも飯の菜に、麩ばかり呉れて置く意趣返しかしら。

一四 貧乏の極に至れば、滋養品を喰ふ事も出來ず、顔色青さめて、幽靈の如くなれば、青貧とも云ふべきに、之を赤貧と名くは如何

人と交際するにも金がなければ、始終赤面して赤耻を搔き、零落しては骨肉の親戚にも、赤の他人の如く扱はれ、着る物がなければ赤裸、汽車に乗りても最下等は赤切符赤貧の由來ザツと斯くの如し。

一五 何も商賣をせずに遊んで暮す家を下田屋とはどういふ譯
是は下田家にあらずシモウタ家と云ふなり、盛んに營業をして居りし者が、何かの手違ひにて表戸を閉めれば、世間の人が見て此家では店をシモウタと云ひ嘸すより遂にシモウタ家の語は出來しなり、されば遣り損なつた時にア、シマウタと云ふも此邊から生れた語ならん。

一六 内幕の苦しき身代を、火の車といふ事如何
身上は繰廻しが肝心だから、何れ車に縁がある、吹けば飛ぶやうな軽い身代なればどイ〜風車、牛頭馬頭より恐ろしい鬼共が、四方八方取巻いて、眉に火の付くやう攻

め立てた揚句、身代を煙にするのが火の車、二進も三進も行かなくなつて、往來の眞中に立往生するのが雷車、外見は紳士風を吹かせ、お手車に乗りながら、高利貸を口車で追返すに、骨を折る連中の多い世の中、大概火の車に乗つて苦んで居る、だから三界は火宅輪廻の應報とお釋迦様も仰やつた。

一七 心配すべき事を心配せずブラ／＼遊んで居る人をハンキと云ふ理由如何ハンキは香氣なり、昔晉の世に竹林の七賢といふ酒呑仲間ありて、天下の衰亂にも一向構はず、太平樂を並べ、毎日々々酒ばかり呑む氣になつて居たるより、斯ういふ人間を呑む氣の人と云ひ慣はしたるなり。

一八 商家の丁稚を小僧と云ふは、如何なる理由ぞ敢て問ふ昔江戸時代大店向では、十五歳以下の丁稚悉く頭髪を剃り栗々坊主なりしより起る、併し是だけの説明にては餘り呆氣無し、商人になる目的は利益即ちまうけが第一にて

まだ商法の秘訣を呑込まぬうちは儲かる筈無く年期を入れて、段々勤め上げれば自然もう毛があると云ふ理窟から、髪を結ふなり、されば小僧のうちはまだ毛がない損毛といふ熱字も此處から出づ、此説明は正直正銘の正札付毛頭僞無し。

一九 一調子變つた人の事を『ヘンチクリン』と云ふ譯如何イヤ下らない事をお問ひなさる、是は昔晉の世に竹林の七賢と申し世をスネた七人の變り者があつた、ソコデ後世氣風のひねくれた人間を、彼れは少し變だ竹林の七賢のやうだと云つたのが、約つて變竹林サ、何と造作もない事で、お茶の子サイ／＼だろ

二〇 短身矮軀の人を珍竹枕といふ譯を伺ひますこれは其の何です北の方の或る處に一の竹の林があつて、寒氣のためかそういふ種類か知らないが、其處の竹は皆何れも丈二三寸位しか育たない、ちよいと見ると芝原だ

らうと思ふ位、實に珍らしい竹林だ、そこでタケの低い人を珍竹林のやうだと云ふから始まつた語だ、イヤサ嘘ぢやないほんとうさ。

○二一 京阪地方にて失策の事を源助と云ふは如何なる理由か

是は源九郎判官義経、一の谷八島壇の浦の合戦に、平家を攻め悩まし、大に威名を顯はしたれど、どういふものか御存じの通り、義経は兎角女難のある大將で、平の時忠の女を妻にして頼朝の勘氣を蒙り、堀川の夜討には静御前と沈々鴨の眞最中で、防禦の備へも碌々出來ず、靜おじやと危い處で手を引合つて吉野落と洒落るなど、お助倍の爲に北國に遁け出した故、贅六の口惡共が源氏は助倍で失策る、源氏は助倍だ、源助々々と云ふ事が失策の代用語となつたものサ、尤も義経以前に木曾義仲、其後に新田義貞、何れも女の爲めに敗戦となつたから、源氏はどうしても助倍の譏りを免れない、併し露助よりはまだ好いやうだ。

○二二 強窃盜詐欺其他、悪事を働く者を指して曲者と云ふは如何なる理由か

松でも杉でも、癖のない木は眞直に生長するが、くねつたり曲つたりするのは何れ一癖ある、そこで人間の根性も、天性の善に従はないで、曲つた奴を曲者と名けた、尤も木は心と云ふて惰怠る木人の物を怒しがる木、盗む木と云ふ種々の悪い木があるから出來るので泥棒と云ふ棒も是から拵らへます、又一説に迂散臭いと云ふて、嫌な臭ひのある人間を、臭いものと呼び、それが約まつてくせものとなつたと云ひますが、漢字の曲と云ふ字を書くのは、どうしても木に譬へて使ひ始めたと思はれます、何れも人間は正路木、堅木にして居れば間違ひ無しです。

○二三 人に物を借りて返さず、又途中で物を拾つても其筋へ届けず自分の所有にするを猫ばいと云ふは如何な譯ですか

古老の語によれば、昔本所の石原邊に老婆の醫者あり、非常に猫好きにて、始終三十

正以上の猫を蓄ひ、猫の間と云ふ一室を構へ、監督の下女一人を置た程だから、人が猫婆くとと綽名を附けた、處が此老婆健忘性で、人から物を貰つても返禮する事を忘れ、何時でも貰ひ切りで居るから、猫婆の語が起つたといふが、こいつは頗る牽強附會たやうに思はれる、著者の考へでは、猫が椽の下などへ糞をするとき、必ずチヨツカイで丁寧ていねいに土つちを懸かけ、臭におひを嗅かいて見て少しも臭におはないやうにしてから止める、そこで物を掩蔽かくすするを猫糞ねこふんといふのだらうと如何いかでござる。

二四 食物しょくものつにかけて意地穢いぢきたきを鼻はなの下したが短みぢかいと云ひ、女をんなにデレノゝするを鼻下びか長ちやうと云ふ、然しからば食しょく色しき兩慾りやうよくの強つよき人は鼻下びかの長短如何ちやうたんいかん

鼻はなと口くちとの中間ちうかん、之これを稱しょうして人中じんちゆうと云ふ、漢かんの武帝むてい曰いはく人中じんちゆう一寸すんそのひよじゆ其人壽ひと一百歳ひゃくさいと、東方朔ほうしやく之これを詰なりて曰いはく、彭祖ほうそは八百歳はちひゃくさい、人中じんちゆう八寸はつすん、想おもふに面かほの長ながさ一丈いちぢやうに餘あまらんと、左さ右大うだいに笑わらひ、武帝むていも閉口へいこうすと云ふ事ことあり、こは餘事よじながら序ついでに記しるす、さて其人中そのじんちゆうの短みぢ

きもの食慾強しょくよくつよしと云ふは、暴食ぼうしょくの爲ために健康けんかうを損そとひ自ら夭折えうせつを招まねく戒いめにて、又人中またじんちゆうの長ながきものは老おいても猶少年なほせうねんの如ごとく精力人せいりよくひとに優すぐる、の謂いひならん、尤も實際じつさいに於おいては鼻はなの下したは伸縮自在しんしゆくじざいにて、旨うまい物ものを見ればアングリ口くちを開あくより自然しぜんと鼻下びか縮ちぢみ、美人びじんを見れば顔かほの造作ぞうさくを崩くずすまじと眞面目まじめめになるより、口くちを緊しつり結むすんで鼻下びかも伸のびる道理だうり、日本ほんの諺ことわざはこゝらより割出わりだしたるものなるべし。

二五 人間じんげんの癖くせに太鼓たいこと云はれるのはどういふ譯わけか
一體鈍たいどんつくに生うまれて、親讓おやゆづりの財産ざいざんをスツテンテレツクに摺すつてしまつたから、親おやの撥當はちあたりで、幫間たいことなつたのです、皮かはは槌馬たしかうまの皮かはと鹿しかの皮かはを張はり交まぜたのです。

二六 太鼓たいこを持たぬ者ものを太鼓持たいこもちとは是れ如何いかん
幫間ほうかんの元祖ぐわんそは例れいの會呂利そろり新左衛門しんざゑもんなり、太閤たいかう秀吉ひでよしに召出めしだされて、滑稽こうけいのありだけを盡つくし、會呂利そろりが席せきに出でなければ、太閤たいかう頗おほる御機嫌ごきげん悪あしく、太閤たいかうの坐敷ざしきを取持とつものは會

呂利に限ると云ふより太閤持と云ひ囉したりと、又一説には四國邊にて六齋念佛と云へるあり、鐘と太鼓を打鳴らして念佛を唱へ、所々押し歩く事なるが、太鼓を持つ者は鐘を持たず、鐘を持つものは太鼓を持たず、因て酒席にても旦那はカネ持、カネを持たない取巻連はカネを持たぬ代りに太鼓持だと云ふ洒落より起りし名稱なりと、先此兩説の中何れでも勝手に採用し給ひ。

二七 長上ちやうじやうに媚こびるを胡麻摺こますりとは如何なる理由りゆうにや

長上ちやうじやうに媚こびるのみにあらず、凡て人を巧く操りて、私慾を逞しうするを胡麻摺こますりと云ふ、胡こは北きたの胡こにて當今たうこんの某國ぼうこくの如ごときを云ひ魔まは惡魔あくま、掏兒すりは説明せつめいにも及ばざるべし。

二八 痘面あはたをジャンコとは如何いかん

痘瘡あはたのために顔かほが引ひつりて、強飯こほりで作りし鬼おにのやうに怖ろしく、蛇の子へびこに似たりとて

蛇の子へびこと云ひ囉し、遂つひにジャンコとなりしなり、因ちなみに記す痘面あはたの異名いみは甚だ多く、一々數かずへ難し、中なかにも可笑おかしきは丸藥ぐらんがくの干場ほしば、蚊死かじず、沙すな原ばらに夕立杯ゆふだちなごなり。

二九 私わたくしの事ことを人ひとが瘦やせッポチと云ひますが、瘦やせせて居るだけは事實じじつなれど、ポチと何なんで附加つひくはへるのですか

是これは大聖人だいせいじんと云はれた孔子こうしと同様どうやうに見立みだてられたのです、孔子こうし鄭ていに適あく、鄭人ていじんの曰いはく、東門とうもんに人ひとあり其類そのたぐひ堯ぎやうに似たり、其項そのうてい臯陶ぎやうたうに似たり其眉そのまゆ子産しんに類るす、腰こしより以下いか禹うに及およばざる事こと三寸さんすん、累々るるく然ぜんとして喪家さうかの狗いぬの若ごとしと、此狗このいぬの名ながポチと云ふので累々るるく然ぜんは瘦やせせ削けけて如何いかにも可哀あはれ相さうな形かたを指さしたのです、瘦やせつぼちは矢張やはり累々るるく然ぜんとして喪家さうかの狗いぬと同一どういの意味いみ、凡夫ぼんぶの癖くせに大聖人だいせいじんと同一どういの稱しょうを受うくるとは亦また此上このうへとなき結構けつこうの儀ぎと存ぞんじます。

三〇 物ものの筋道すぢみちを間違まちがへた時とき、疝氣筋せんきすぢと云ふ理由りゆう如何いかん

仙人と云ふ者は世の中を拗ねて、人が右へと云へば左、丸いと云へば四角だといふ旋毛曲りがあるから、何でも無理窟を並べる事を仙人のやうな氣心だと云ひ初め、とうく疝氣筋といふ語が出来たのです。

三二 容易いと云ふ事を、お茶の子さいくと云ふばどういふ典故から出たので

お茶の子は即ち蝦茶式部の生んだ子です、彼等は再々私生兒を拵へるのを別に苦痛とも耻辱とも思はないやうに、墮落したものが多から造作もない事の譬へになつたのです、又お茶の子は支那で點心と云つて、茶菓子の事だ、大抵茶菓子は蕎麥饅頭數個位だから、腹の空いた時は二度でも三度でも換へてペロリと喰れる、ソコデお茶の子再々サ。

三三 下駄は一足と云つて其實二本の足へ穿く、然らば一對と云ふべきが至當な

り、それとも昔下駄を始めて拵へた時分の人間は、傘のお化の如く一本足なりしや如何

イヤどうも足下も事理を通ぜぬ男ぢや、一足飛と云つても一本足で飛ぶ譯では無し、一手專賣と云つても手が一本で物を賣る事ではあるめへ、一隻眼を具して天下を達觀すと云ふても山本勘助の事に限りはしねへ、こんな質問は答辯の限に非ずぢやどうぢや一本參つたらう。

三三 逃走を隨德寺とは如何に

此語はスツト昔からある語で、其根元は鎌倉の北條時代相州走水觀音の側、一目山隨德寺境内に、眞暗山房と云ふ僧寮がありました、其頃元朝から佛法弘通を名として澤山の謀者を僧侶に仕立て我國に遣はしましたが、中には如何にも名僧智識と思はれるのがあるので、北條家の歸依淺からず、多くは此隨德寺の眞暗山房へ送りて手當厚

く致した處、何れも元が間諜だから、好い加減の時を見計つては本國へ逃げ歸るのでソラ彼の坊主も逃げた、ヤレ今度のも逃げたと、隨德寺の坊主と云へば逃げ出すに極つて居るので、後世逃ける事を隨德寺と云ふ様になつたのです。

○三四 逃る時一目散とはどういふ譯ですか、又一目散に逃る時の速度は、滑稽汽車より早いでしょうか

一目散は薬の名です、昔支那の齊といふ人が、或る仙人から授かつて、秘藏して置いたのを、女房の嫦娥と云ふ女が窃んで服用すると自然身が軽くなつた、齊が之を知つて不埒な奴だと立腹して捉まへやうとしたが、嫦娥は薬のお陰で、忽ち月の都へ墮落イヤ駈上つたさうです、故に一名を一月散とも云ひます、月と目と文字の似たのも何かの因縁でせう、或ひは一目山隨德寺と云ふ寺から賣り出すと云ひますが、露兵は大分此薬を所持して居るさうです、彼が逃足の早いのも其爲と見へます、滑稽汽車に比

較すれば、どうして十分の一の速力にも及びません、滑稽汽車はどんな事があつても人に捉る氣遣ひなく、オイと云へばソレと何處へでも直に逃げます、試みに少々難題を出して見給へ、必ず逃げ出すから、之に異つて泥坊や露兵は、一目散で逃けても時捉まります。

三五 苗字の下へ公の字を附けると尊稱になり、名の下へ公の字を附けると輕蔑の意味になる、例へば近衛公、徳川公と云へば有難く聞へ、熊公、八公と云へば安つばい、此儀は如何に

是は其人に依りて姓と名との區別は無い、近衛公と云つても篤麿公と云つても、又徳川公も家達公も、尊敬の意に於て格段違ひは無からう、中村歌右衛門事山本榮次郎を捉へて、山本公と云つた處が却つて馬鹿にするやうなもの、故三遊亭圓遊事竹内金太郎を竹内公と呼んでも下らないではないか、だから姓と名とは少しも關係しない、

唯其人自然の貫目にあるのだ、尤も公の字位古今の相場の違ふ文字はない、昔、公の字の用ひ處は、公方様、大公儀と云ふやうに、幕府を代表して、スバラシク巾を利かせたものだ、處が今では公衆、公會、公民と普通一般の庶民に適用されるやうになつたから封建制度が破壊されて、平等主義になつた第一の證據は此字だらう、尤も昔の諸公は百官の上に位して居たが、今の三公は湯屋で人の身體の垢を流して居るから、無理もない話サ。

三六 私主人は物は物、可憐に云ふものだ、何でも上におの字を付けて云へと申し

ますが、奈良漬には困ります、是は何と云つたら可いでせう

おは御の字を略したのだから、御奈良漬と云へば可いではないか。

三七 天麩羅紳士とは如何なる紳士か御説明を

天麩羅の金時計、天麩羅の金指環、何から何まで天麩羅づくめ故、天麩羅紳士の名稱

天麩羅

起れりとの説あれども、尙一層深く詮索すれば、今の所謂紳士は天麩羅の元祖たる石川五右衛門の系統を引ひて、多少泥坊根性無きものは少し、故に斯く名けしなり。

三八 酒黨を上戸と云ひ、甘黨を下戸と云ひ、上下の區別自から之あり、然るに

下戸黨なる者動もすれば、跋扈跳梁上戸を侮るの弊あり、其名分を正すべし
 上戸、下戸の區別は決して上下の謂ひにあらず、酒を樽より徳利に移す時、漏斗と云ふ器を用ふるより、酒を飲む人を指して漏斗と云ひ、それが訛つて上戸となり、之に對して下戸の名稱起る、何れ飲酒家の我田引水主義より始まりしものにて天下の通論にあらず、又酒黨の一名を「左」と云ふ事ありて、漢書周昌傳の註に、當時右を尊んで左を卑む、故に秩位を貶するを左遷と云ふと、之によれば酒黨却て甘黨の下にあるもの、如し、何ぞ必しも其上下を論ぜんや。

三九 二十歳をハタチと云ふは如何なる故なるや

二十歳は丁年と申して、最早一人前の人間となつたもので、之を鳥に譬ふれば、羽翼既に成り、何處へでも自由勝手に飛で行かる、時なれば、即ち羽立ちの頃と云ひます

四〇 私は當年二十歳、最早丁年に達して、赤ら顔の至極丈夫な身體ですが、人が青二歳と申します、二歳は十八年の昔で、青くもないのを青二歳とは是如何

五色の方角に配すれば、青は東方の色、四季に配すれば春に當り、陽氣の盛なる有様を形容したので、所謂青年といふ熟字も是から出で、決して侮辱の語ではありません二歳は即ち二才で才智が二人分あるといふ譯で、是も至極褒めた事で、少しも腹を立つに及びません、ソレ左様云ふ中に、貴公がニコ／＼笑ふ顔が目に見へるやうだ、餘り増長しては不可ませんよ。

四一 十分と云へば其上は無らうと思ふに酒吞が最う十二分に酩酊しましたと云

ふは、如何なる勘定でありますか

圖部六と云へば可成の出来なれど、最も一つお重ねなさいと強られ到道圖部六が二重になつて即ち十二分。

四二 焼芋屋の看板に十三里と八里半と二種ありますが、どちらが眞正ですか
八里半は栗(九里)に及ばざる事絶かに半里十三里は栗より(九里四里)旨いと云ふ洒落だが、ゴリ／＼(五里五里)で十里の諸は喰られたものでないから、看板は決して信用にならぬ。

四三 飯焚がお三、湯屋で人の背中を洗ふ男が三助、足輕が三ピン、三の数は餘程意氣地のない者と思はれるが如何

問者は其一を知り其二、イヤ三を知らぬ人なり、畏くも三種の神器を始めとして支那に三皇五帝あり、三才は天地人、三徳は智仁勇、三達尊は爾齒徳、三國一の富士の山

三々九度の盃、三十三間堂は棟本の由来、三の字のエライ所を數へ來れば、三千三百三十三疋ある山王の猿より多い、三の字の馬鹿に出來ぬ所は是れだけにて明かなり。

四四 オツチヨコチヨイとは何ぞ明らかに答辯せよ

オツチヨコはお鍾子、即ち酒盃にてチヨは千代、イは語尾の延びたるなり、此一盞を獻じて千代を壽かんとの意味なるが、茶屋の女中共のゾンザイなる、貴客お鍾子を……千代迄も祝ふて！と云ふべきを、オツチヨコチヨイと早言に云ふので、何國の國語なるや分らぬものとなりしなり、されば元客を尊敬すべき語なるに、今は反對に侮蔑の意味と變ず、所謂野呂間を捉へてお目出度と云ふと同様なり。

四五 ヘブレケとは何なりや

ヘブレケは人名にてドロケン國の太守なり、元はグヅツク州に生れてヨツバライ學校に入り、卒業してドリンク(呑助)の學位を授けらるるか性來左り利にて管を捲くに巧

みなり、顔色赤く火の燃ゆるが如く、吐く息は熱柿の臭氣に似たり、外出の時は從者に己れを加へて彼方へ四人、此方へ四人、千鳥足にて蹠躑き歩き、道路溝川の見分も爲さず、押通つて車馬に突當り、頗る危険の人物なり。

四六 ザツクバランとは如何なる意味なるや

ザツクバランと云ふ語は、牛肉店の二階より始まりしなり、ザツクは葱の五分切にてこれを肉の上へバランと載せて來いと云ふ事なれども、氣の利いだ江戸ッ兒は、オイ姉やザツクをバランとして持つて來やと、捲舌で云ふ處が如何にも勇み肌に見えるので、心に蟠まりのないイナセな人をあれは、ザツクバランだと云ふやうになつた次第サ。

四七、ヘナチヨコの解を示せ

ヘナは雛の轉訛なり、關東の或地方にては總てヒをへと云ふ、ヘル飯(晝飯)へ傘(日

傘)へ物(干物)の類を以て證すべし、そこでヘナチヨコは雛猪口、雛様の猪口なれば、蜆ツ貝のやうに小さなもの故、客裔な人間を罵る時雛の猪口で酒の代りに水でも飲め、雛猪口が相應だ、雛猪口野郎雛猪口奴と云ひしか訛りてヘナチヨコ。

○四八 オツベケベツボベツボとは何處の國語なりや

是は何處の國語にもあらず、我邦に昔し川上八十梟帥と云ふ者あり、其死後冤魂化して名詮自稱とやら八十正の梟となり、墓の上にて月青く風靜かなる夜半、彼處にはオツベケく、此處にはボツボくと啼き合ひしか、其子孫なる故の川上音次郎、先祖の聲色を真似て流行せしめしなり。

○四九 お茶ツピーとは何ぞ

是は其昔遊女がお客のない時に、抱え主が何も爲せないで遊ばせて置くのもつまらな、いと云ふので、内職に茶を挽かせたものです、そこで餘り賣れない遊女の一名をお茶

挽と云ひ、お茶挽が又お茶ツピーとなつたので、現今出過ぎ女の代名詞に川うるのは些と間違つて居ります。

○五〇 ベランメイとは何處の國語なるや

其れを御存知なきか笑止千萬なり、凡そ地球上の人種は五つに別れたり、引込み人種、出しやばり人種、のらくら人種、握擧人種、あにイ人種、是れなりベランメイ人はアニー人種の中なりと西洋の論語といふ本に書いてある、以上でベランメイといふ國のある事は明かなり、此國人は一種の不具にして拳骨二つ常に肩の所にあり、之をやヅウといふ、時に向ふ鉢巻をするものもあり、べらくく巻舌で饒舌りつゞけ人に吼え付いては幾分か酒代をせしめ、ウメイ事をしたと喜ぶが常識なるが故に、ベラウメイと言ひしを後世ウとんと音便により、ベランメイとなりしなり。

○五一 死んだ事を西國すると云ふ人がありますが、其意を伺ひます

死ぬ事ことに就つては種々いろいろの符牒ふてふがあります、鳥とりのやうに空そらを飛とぶものは落ちた、魚ういのやうに水中すゐちゆうに泳およぐものは上あつた、郵便配夫いゆうびんはいふは行き着ついた、木挽こびきは挽取ひきとつた、紺屋こんやは藍果あまはてた、劍客けんかくは参まつた、俳優はいゆうは樂らくになつた、其地折そのたおれた、ごねた、くたばつた、往生わうじやうした、など、夫々理窟それぐりくつがあります、西國さいこくと云ふ事は餘り聞きません、併しかし極樂淨土ごくらくじやうどは西方さいほうにあるから、お尋ねには及およばぬ事に思おもはれます。

○五二 嫉妬しつとの事をチン、いと云ふは如何なる理由りゆうぞ

チン、くは犬いぬの藝當げいたうですが、夫婦喧嘩ふうふけんくわを犬いぬと猿さるに譬たとへてある處ところから、嫉妬しつとの事をチン、いと云ふのです、御亭主ごていしゆが一晩留守ひとぼんるすにして、朝早く微醉機嫌ほろよひきげんの咬くはへ楊子やうじか何かで歸かへつて御覽ごらんなさい、細君さいくんが横目よこめでチロリ、鬢びんのほつれ毛げを二三本前齒ほんまへばで嚙かみ切りながら、罪つみもない煙管きせるを火鉢ひぼちの縁ふちで擲たきのめす處ところはわん、く、吠ほえ立てもしないが、少々犬さうくいぬになりかけた處ところだからちん、くと云ひます、此時一寸このときちよつとした劍突けんつとくでも呉くれて御覽ごらんなさい、直す

にいぬとさるのと嚙かみあひ合あが始はじまります。

○五三 へチマ野郎やらうとは如何なる譯わけ?

へチマは絲瓜いとわりなり、和名上わみやうかみのいの字じを略りやくしてと、うりと云ふ、いろは順じゆんに依よれば、とはほへといち即すなはちへといちの間に挟はさまる、是れへち間まなり、故ゆゑにとうりを隠語かくしごたばにてへち間瓜まうりと云ふ、此瓜このうりが蔓つるより下さりてぶら、くする有様ありさまを、遊手徒食いゆうしゆたしよくの怠慢者なまけものに譬たとへ、放蕩息だうちやく子こなどを嘲罵てうばする語ことばに用もちうるなり。

三 滑稽字解

五四 子子子子子子子子子子子子と書いて何と讀むや

これは編者へんしやより先さきへチャンと讀んだものがあるから、別段編者べつだんへんしやの手柄てがらにもならない問題もんだ、それは小野篁おののたかむらと云ふ人で、嵯峨天皇さかの時に内裏だいりへ無惡善むおんぜんと大文字おほもじに書いて建札たてふだ

をしたものがあつた、嵯峨天皇がそれを御覽になつて、何と讀むかと近侍の人々へお尋ねであつたが、どうもさがないと讀んでは天皇へ對し不敬に當るから、何れも閉口して差控へて居たところ、天皇は小野篁に向ひ、其方は博學秀才の聞え高ければ、よもや是が讀めぬ事はあるまじと、退引ならぬ勅説であつて篁恐るく、左様で御座る、恐れながらさがないと申して君をのろひ候者と覺え候と、奏上した處が、天皇は御景色あしく、餘人に讀めぬ者が如何に博學なればとて、さうすらりと讀める筈無し、こは其方が書きたるならんとの御難問に、篁更に驚かない、イヤ勅説には候へども、拙者は誰が書いたものでも、文字でさへあれば必ず讀みますと云うので、天皇が然らば是を讀めと、差出されたのが、子の字十二の續け書、篁は子子子子子子子子子子子子子子子即ち猫の子の子猫、獅子の子、子獅子と讀んだといふ事が、宇治拾遺物語に出て居ますから、一寸御紹介までに。

五五

莫大小と云ふ語は英語か佛語か又は日本語か

伸縮が自由にて、少し位大きい足でも小さい足でも、間に合ふ故莫大小の字を用ゐたれど、是は支那人の工夫、めりやすと云ふ訓は日本にて始まりしなり、其理由は最初此股引を多く旅行用にせし故、人が之を穿いて門口に出るを見れば、近所の人々が貴方旅のお仕度で何方へかメ、ヘリヤスかと尋ね、當人はハイ何處其處まで往つてメ、ヘリヤスから宜しくお頼み申しますと云ひしよりメリヤスの名稱は起りしなり。

五六

大晦日とはどういふ字義なるや

晦日をみそかと訓するは、月末に至りて諸勘定をする時、平生女關構へを立派にして有福らしく暮す家でも、ヘイ米屋で御坐い、はい酒屋で御坐いと、ゾロ／＼書出しを以て責め立られては、大概尻尾を出し所謂味噌を附らる、故、之を味噌日と云ふ、大晦日は一年の末にて大味噌を附られる日なれば然云ふ、見給へ平生威張りて金持面を

して居る人間が、大味噲を附られて逃出した醜態を、尤も年が改まつて春の日長になれば、又貸して上ても宜しう御坐いますと云ふが、商人の口上そこで春日をカスガと訓む餘計の事ながら序に一寸辯じ置く。

五七 目出たいと云ふ語は如何な意味なりや、目が飛出しては随分閉口の次第なるに、譯の分らぬ事もあればあるもの、その説明如何

日本人は兎角賭博好きの人民なり、されば先年のやうに富籤類似の懸賞が人氣に投じて、猫も杓子も其真似をするやうになる、ソコデ骰子と云ふ奴が昔から巾を利かせ一六勝負を争ふ連中が、好い目が出て勝つことを祈るより目出たいと口癖になりて、一般の適用語となつたり、どうだスツカリ合點が參つたらう。

五八 年頃の娘と書く場合に、破瓜の字を用ふるは是如何
破瓜は十六歳の事なり、瓜を割るとき豎十文字に庖刀を加へて、其形八八となる、八

が二個故十六なり、最も之を乗算九九に讀まれては、破瓜の年齢も八八六十四歳となる。

五九 紳士の字義を問ふ

おい、コソ面をして無暗に突張つて歩くを以てシンシと云ふ、シンシは紺屋の道具にて布を突張らせる道具なれば斯く名けたり、又漢學者に聞くと、紳の字の糸扁は、人に縫りて綱渡りを巧みにすると云ふ義を有し、旁の申は猿智恵を示したるなりと。

六〇 灰吹に吐月峯と記してあるは如何

是は蜀山人が船に酔ひ、ゲロく遣つて苦む最中、傍の人が如何に先生でも、此處では狂歌は詠めますまいと云つた時に、『よめばよむ月と云ふ字を二つよむ、グワツと吐いたりグツと吐いたり』と云ふ故事から來りしものにて、グツ、グワツと痰を吐き込むから吐月、峰は向ふに沖(炭火のシャレ)が見えて此方が峯だと山水の景色に見立

て、付しなり。

六二 岡目八目とは如何なる譯に候哉

是は字違ひなり、實は阿龜八目と書くべし、彼の阿龜女郎の目を見給へ、兩方の眼尻垂下して八の字の如し、或は傍目で見れば八ツ目にて見る如く非是黑白分明なりとの意、局に當る者は迷ひ、傍觀者却つて明かなるに同じと云へども、這は餘り理窟の穿鑿に過ぎたり。

六二 文字は皆理窟詰のものなりと聞く、然るに府の下へ肉を書て腐ると説む、

府下にて賣捌く肉は皆腐りしものなるや、肉食流行の此節柄一寸御尋ね申す是は大分皮肉に御出なすツたな、「いろは」ばかりでも何十軒と云ふ牛肉店に、豚肉、鳥肉、馬肉などさへ賣る店あれば、随分不埒な商人も多く、嚴しい取締りも行届き兼ねるから腐敗肉も甚だ多い、併し其處へばかり目を注げて文字の講釋とは烏滸がまし

い次第サ、一體都會の人は驕奢に狂れて、輕薄の風が増長するので、道義などは自然地を掃ふやうになる、されば毛唐人の詩にも長安輕薄子なんて澤山遺つてある、見給ひ此數年來東京府の役人とか名譽職とか云ふ連中にも賄賂だとか何とが、繩付の腐敗漢が數へ切れぬ程出たではないか、ソコデ腐の字は府内人の三字を重ねたのだ、府肉ではまだ解剖が足りぬ、能々考へて見給ひ。

六三 日が西に傾けば泊る、水にて白くすれば晒す、されば泊と晒とは意味を取違へて訓むに似たり、其理如何

古語に曰く、秋陽曝之と、秋の日は西に傾きてより光熱殊に烈し、且つ春夏秋冬を四方に配すれば、秋は蕭殺の氣にして西に當る、故に晒の字之によりて生ず、又泊は即ち白水の二字にして、錢の一名を白水真人と云ふ、泉貨の熟字もあるにあらずや、泉錢同韻なるを以ても知るべし、諺に曰く裸で道中がなるものかと、無錢宿泊は古より

法律の禁ずる所、因て泊らんと欲するには先づ錢の有無を問ふ、錢無ければ野宿するより外に仕方無し、故に泊字をトマルと訓ず、決して意味を取違へしものにあらず。

六四 敗北と云ふ熟字ありて、敗東、敗西、敗南の熟字無し、敗けし時は北へ逃るに限りしものなるか

北は来たなり、お前も逃けて来たか、己も逃けて来た、誰も来た、彼も来たと、云ふものが何日の頃より来たか北と書き誤まり、其儘になりしなり、尤も今日にては北方の露西亞が、何時でも敗軍と極まり、敗北の熟字其實を示す時となれり。

六五 日は月より大きい物と承知して居ますが、文字に書くと、楷書でも草書でも月の方が日より大きいのは、道理に叶ひませんが是は如何

問者は其一を知て其二を知らぬと云ふ者、日は廿四時間、月は三十日、日より月の方が長いのに気が付かれませんか。

六六 時計をジケイと讀まざるは何故ぞ

時計の始めて舶來せし時、其名稱に就て種々評議ありしが、針の廻轉する様は、北斗星の劍先に似たり、音を發して時を報ずるは鶏の如しとて斗雞の二字を擇みしが、其後文字に暗き人々が其名を知りて其字を知らず、時を計る道具故時計ならんとて書きしが、普通に行はれしなりと、鹿爪らしく講釋する人あれども左にあらず、實は雞の代用品なり、トケイツコーの代りなりと云ひ囃して、後に間だるがつてトケイコーの頭だけ取りてトケと呼び慣はしたるなり、されば時計の文字は無論後よりの當字と知るべし。

六七 立食もリツシヨクと讀めば高尚で鄙しくな、か他に此類の詞ありますか

あるともく、先づ古金とこきん、おまへと御前、足下とあしもと宮城とみやぎ杯際限がない、どうしても音讀のはうが立派に聞えるから、小砂眼入的の漢語は廢められ

ない。

六八 鼻と云ふ字の起りを問ふ

漢字くらゐの理の積んだものは無い、古い女が姑、家に入れた女が嫁、朝夕耳を聳て、舅姑の話を知らうとするから聳、と云ふ類で、目先も見えず人の話を聞き分くる耳も持たず少しの事を鼻に掛け口ばかり達者なから口と鼻だけの人間と云ふので鼻よ。

四 滑稽文句

六九 近江泥坊に伊勢を食といふ諺あり實際さる事ありや

是は滅相なる御質問かな、近江は八景の勝地を有したれば、所謂地靈人傑にて、此國に生長したる人々は何れも優美なる殿御振、又神風吹く伊勢の國の人は、何事も正直を專一として、神の心を失はぬやうに心掛るより、近江殿御に伊勢子正直と申したる

語が、後世訛りて近江泥坊に伊勢を食など、途轍もなき諺となりしなり。

七〇 『箸にも棒にも懸らぬ奴』と云ふが人間は皆輕業師ではあるまいし、箸や棒に引懸るものは一人もなからうと思ふが如何です

左様、箸にも棒にも懸らぬ奴と云へば、放蕩者の骨頂ですな、蕩の字は蕩けると云ふ字で、お粥の煮返し見た様にぐにやくした奴、尤も人間は大抵輕業師で、劍の刃を渡る様な狂言をして其日を送る山師もあれば、人の鼻毛を手繰つて綱渡りをする女もある、明治の初年に電信の綱渡りと云ふ語が流行したが此狂言を演じて喝采を博したのが、今の貴顯紳士、至極お上手であつたとの評判、其割合をすれば箸や棒に引懸るのは造作もない。

七一 古來『旅の耻はかきすて』と云へる俚諺あれども『君子慎獨不愧屋漏』てふ主義に戻り、風教上甚だ宜しからず、斯る無責任なる諺は一刻も早く撲滅させ

たし

おやく／＼大層お固いお方が舞ひ込みましたな、拙者もフロツコートにシルクハット、若くは羽織袴にて忝しくお出迎ひ申すべきであるが、どうも窮屈な事の嫌ひな人間故、無禮の段は眞平御容赦を願ひます、併し御安心なさい、此諺は足袋屋職人が型へ當て、布を裁つた時に、周圍へ残る布片は何にもならない屑で、用途がありません、其處で「足袋の端はカキ棄て」と申した次第、何も別段むづかしいものではありません、サア斯う分つて來ると撲滅など、四角張る必要もありません。

七二 死ぬるを忠義といふ事は、いつの世からのならはしぞ

イヨ一待つてました政岡君、どうする／＼ヒヤ／＼ア、君の御子息千松君は、現在親御の君でさへ「其方の命は出羽、奥州、五十四郡の一家中所存の臍を固めさす、誠に國の礎ぞや」とお褒めになる位だから、露助の彈丸に中つても、八汐の懷劍で突殺さ

れても死んで忠義を立つる精神に違ひはありません、まア千松君なども今日生きて居れば早速征獨軍に加はりて功名を現はしたでせう、それに反して八汐と云ふ婆は實に憎い奴ですナ、彼れは獨探かも知れませんが、さう思つて見ると何處か獨探面をして居ますヨ、さて肝心の御尋ねの方ですが、どうも是はいつの世からと判然申されません、我日本は開國以前から此忠義といふのが根本になつて居て、忠義の爲なら何時でも生命を棄てる事と決定つて居ます、こんな事をお尋ねなさるとは政岡君にも似合はぬ愚痴、は、ア成程、君も令息の死んだので、さすが女の愚に返りと彼處で床が云ふ通り、少々精神錯亂の氣味で下らない事を御質問においでなすつたのですナ。

七三 寺小屋の義太夫に源藏夫婦が五色の息を吐いたとあるが呼息にはそんな色采がありますか

あります／＼支那人傳來の熟字にも、氣を吐くと虹の如しと云ふのがありませう、虹

に七種の色彩あると、小學校でも知つて居る、之に比すれば源藏夫婦の呼吸はまだ二色足りない、想ふに松王の眼がでんぐり返り、逆様眼で見たから、七色を五色と見違へ、人に話して後世へ源藏夫婦が五色の息といふ評判が傳はつたのだから。

七四 『ソリヤ聞えませぬ傳兵衛さん』と云ふ處より考へれば、お俊は聾なりしや朝顔の深雪が夫の跡を追掛け、大井川に至り川が止つたと聞いて『見えぬ目に空を睨んで』とある、又先代萩の千松は『お腹がすいても飢じうない』とあるから、聾でなくとも聞えぬ事もある道理。

七五 二里や三里は傳馬で通ふ、五里と隔たりやヤツコラサノサと、云ふ歌があります、其意味を

さてく君も明治ツ子にも似合はぬ事を問ふものかな、是は輕氣球で天へ上る事を歌ひし也、二里や三里の高さなれば、空氣も人體の生存に格別差支へなき程故、即ち天

まで通ひ得るが、五里となつては空氣が稀薄にて、迎も生物は生存し得られぬと云ふ意味なり、天までを傳馬でと思ひしが誤解の原因と思ふ、君最う少し物理學の本でも讀み給へ。

七六 『やみのよになかぬからすのこえきけばうまれぬさきのちちぞこひしき』とは如何なる意味か

『水底の山に登ればまだ咲かぬ花の吹雪の散り果てにけり』と云ふ歌と同一の意味御熟考あれ。

七七 『お江戸に田が無し畑無し畑に蛤是も無し』と地方にて唄ひ居れども、其實江戸の昔より今日東京となつても、神田と云ふ大きな田あり又本郷には大根畑と云ふ處あり、不審の至に堪へざれば、一寸其理由をお尋ね申す能くお尋ね下さいました、サアずつと奥へ、お茶でも召上れ、さて早速御口上に就て

お答へ申しませう、一體彼邊は武藏野と申した時代に、明神社領の田地であつた、即ち神の田と云ふので神田となりました、今の美土代町も實は神戸代、(代は苗代と同一の意味)と書くべきです、其後江戸となつても神田の子は氣が早い、ちよいとした事でも直になんだかンダと大騒ぎをするから。

七八 李白の詩に白髮三千丈と云ふ句あり、如何に毛唐人でも其様に長き頭髮はあるまじ、敢て其理由を問ふ

唐時代には今の辨奴頭にあらざれば、其位の頭髮は確かにありしなり、普通人間の頭顱にて毛髮の生ぜし部分は、面積方八寸以上を有す、方一寸の面積に一千本の毛髮發生するものとすれば、總計六萬四千本一本の長さ五寸にして三千二百丈となる。

七九 三更月を踏んで來れとは、むづかしい注文ですが、どうしたら好いでせう是は龜井少琴と云ふお轉婆、今で云へば海老茶式部の隊長が、雷首と云ふ男から、こ

八 誰家女、嬋娟真可憐、君無王上點、我作出頭天と云ふ詩を贈られたので、ズツとお高くとまつて、扶桑第一梅、今夜爲君開、欲識花真意、三更踏月來と返事をしたので、月を踏むと云へばむづかしいやうですが、ナニ造作もない事で、有頂天に飛上つて、球乗の稽古をするつもりで遣れば出來ます、併し雲の斷間から落ると危険だから浮雲と書いてアブナイと訓みます。

八〇 艱難汝を玉にすと云ふ語あれども、人間が如何にして玉となるや桂庵が藝娼妓酌婦なぞの候補者を指して玉と云ふ、而して斯る境遇に沈む者は、何れも親の爲めとか亭主のためとか、艱難辛苦の極、其身を賣るものなれば、即ち艱難よく玉となるなり、或は艱難汝を金にすと云ふも意味は相同じ、金や玉になる女もあるに石になりし松浦佐用姫は餘程不思議なり。

八一 讐敵の如く互に相憎む者を形容して、犬猿音ならざる間柄と稱すれども、

小生の實見する所にては、猿芝居の馬の役は必ず犬が勤むるなど、決して仲の悪しきものにあらず、因て犬猿の諺は以來中止すべし

犬と猿は、其昔桃太郎に隨從して、鬼ヶ島征伐に向ひ、大功を顯はして金鵄勳章を受領したり、所謂同功一體の間柄なれば、貴説の如く讐敵を形容するには不適當ならん蓋し此俗諺の出所を按ずるに、豊太閤が木下藤吉郎と云つて、まだ足輕の頃、前田犬千代が淺野又右衛門の養女お萬（後に北の政所）に懸想し、縁談を申し込んだ時、藤吉郎智辯を揮つて、此縁談を斷り、自分がお萬を娶りしより、足輕仲間の彌次馬が岡焼半分に、双方の感情を害させやうと思ひ、藤吉郎の顔が猿に似たのを幸ひ、猿は犬の仇敵なりとて、種々の事を云ひ觸らしたるより、此諺は生ぜしなり、併し裏店社會の夫婦喧嘩には宿六は山の神をさると云ひ、山の神はこんな處にはいぬと云ひ、キヤツ〜ワン〜と、吼えたり引掻いたりする事あれば、あながち犬猿の諺を中止するにも及ぶまじ。

八二 詩歌文章等の奇警の句に對し奇想天外より來ると評する者あり實際然る事のあるにや

心理學上斯る事のあるべき謂れなし、然るに世往々奇想天外より來ると唱ふる者あるは、天蓋即ち頭を天外と間違へ、奇思妙想の腦裡より湧き來れる尋常一様の現象を天外より來る者と誤解せしのみ。

八三 男心と秋の空、女心と秋の空、以上何れが正しきや

男心と秋の空の方正しき事云ふまでもなし、併し變り易しと云ふ意味にあらず、秋の空は高く澄み渡りて如何にも心地好きを云ふ、女心のクヨ〜として些細の事にもメソ〜泣出すは、時雨空と云ふこそ好けれ、併し編者は至極の女嫌ひなれば諸君其心にて聞き給へ。

八四 親の光は七光とは如何

親爺が貯めて置いた金の光り、之を使へば親爺の目の玉がヒカリ、合せて二つの光でせう、それから頭の瓦から五光がさすから、二に五足すの七、これでお分りでせう。

八五 私は或女から戀ひ慕はれて一通の手紙を貰ひましたが、中に切なる思ひに胸を焦し、戀の暗路に踏迷ひ云々、といふ文句がありました。どうも合點の往きませんのは、胸を焦す程なら、火の手が上る筈、火の手が上れば暗路にも踏迷ふ事はあるまひと思はれるんですが、これはどういふ理窟ですか

イヤ是は餘程火の手が強い、熱度が嵩じて居ると見える、どうも春先から夏向へか、ると、斯ういふ患者がボツ／＼飛込んで来る：：エー何ツ、此方の事で：：其の何です、戀の火は全體無煙石炭、無煙火薬と同様で、バツと燃え揚るものではありません、されば暗路は矢張り暗路で踏迷ふ筈です、胸の焦けるといふも無論黒焦けの事では

能く人が此道にくらうすると云ひますから、あの道は頗る危険です、ナニ道しるへの瓦斯燈を建てたらよかろうと仰やるのですが元來戀は曲者ですから、暗い方が好いさうです。

八六 馬鹿の三杯汁と能く申しますが如何なる事でありませるか、詳しく教へて頂戴

三杯汁と云ふ事は記者も今迄聞及ばず、三杯酢の事なるべし、其なれば深川の名物、バカの剃身を味淋、酢、醬油の三杯酢に漬して食物にする事にて御質問にも及ばぬ譯、ア、分つた、是は吝嗇坊が食客を罵る語にて、飯は三椀、汁は二椀と云ふ杓子定規を楯に取り、若し食客が汁を三椀吸ふと、馬鹿の三杯汁と稱して、キメ附るなり。

八七 おだてともつこに乗りたくないとは如何

昔或る田舎に一人の百姓あり、領主の行列を見て、何卒己れも一度彼云ふ風に、轎に

乗つて見たいと思つて居ると、近所の者が大勢其氣振を悟り、お前は男振が殿様にしても耻かしくないから、已等がお供となつて出掛けべいと、轎の代りに土を運ぶ春を持出し、其男を煽動して擔ぎ出した所が、餘り威勢能く走つて、乗つて居る男を途中へ振落し、腰骨を挫きたるより、此諺が始りしなり。

八八 俗に木で鼻を括るといふ事あり其括り法を問ふ、特に編者の顔を巻頭の押畫で拜見すれば、鼻の低き事夥し、あれでもくゝる事出来可申歟

木で鼻を括る事はお茶の子サ、二枚の板の間へ鼻を挿んで、キューツと左右から押付るの事で、むづかしくもない、木片で鼻液をかむのと同じ方法で宜しい、又編者の鼻が低いなど、は途轍もない侮辱だ、滑稽問答巻頭のカットは、無論拙者の肖像であるが、畫工に賄賂を遺らないためあんな顔に書いて了つたのサ、結局男王昭君とも云ふべきものだが、實際の肖像を書かれては世間の女共が五月蠅いから、態とあのまゝにして置くのヨ

して置くのヨ

八九

東京の通人社會にては一寸濫皮の剥けた女を見てもオツ力と云ひ、風變りの料理を喰べてもオツ力と云ふ一體オツ力とは如何なる力なるや

オツ力は御通力即ち神通力の略語ぢや、昔白面金毛九尾の狐が、宮女玉藻前と化けた時、天下一品無類飛切の美人に見えたので以來人の注目を引くやうな別嬪は、皆神通力を得た狐の化けたのではないかと、お野郎方の臆病から、アレ見や彼りやア御通力を有つてるコン／＼ぢやねへか(コン畜主と云ふ詞も是から始まる)と云ひ慣はし、末には目鼻の満足な女でさへあれば、ソレ御通力だと云ふたのぢや、それが食物や衣服にも及ぼして、少々異つたものは何でもオツ力と云ふやうな譯ぢやテ。

九〇

江戸ツ子のチャキ／＼と云ふ事あり、江戸ツ子だけは明れど、チャキ／＼とは何の事やら分らず、此意味を問ふ

江戸ッ子が第一に自慢するのは神田の祭禮で、大事の娘を苦界へ賣り飛ばしても、揃いの浴衣で向ふ鉢巻、何でいペランメイと氣前を見せる處で、賣られた娘は阿爺が氣違ひになつたと泣いて騒ぐ、阿爺が氣違ひだからチャンチキく、山車の上でも馬鹿囃子がチャンチキく、それを約めてチャンキ、又約めてチキヤく、是ですツかり分かつたらう。

九一 お前麻布で氣が知れぬとは如何なる譯か一寸御説明を

麻布は目黒、赤阪、青山、芝の白金などに取巻かれて居るから黄が知れぬといふ洒落なり、若し麻布が黄なれば、そこで五色が揃ふ譯何と御了解になりましたかな。

九二 死人に口無しとは是如何

死人と雖も汽車往生か何かで、滅茶々々に破壊せられざる限りは、口は慥かにあります、併し古來人が殺される時、口惜しいと云へば死ねば口が無くなるものと考へられ

る、尤も口は生命を續ぐ食物の這入る處で、是がなければ一日も生きて居る事は出来ないから、口は生命と同様に大切なり、されば人間の數を算ふるにも人口が殖た人口が減つたと云ふ、口の大切なる事は易で分る、故に死人に口なしと云ふは、死人に生命無しと云ふと同一の意味にて、至極道理に叶つたものと思はれますが如何です。

九三 何が何して何とやらと云ふ事あり何の事やら分らず何卒御教示あれ

何こんな事は何でも無い、君も芝居ぐらいは分るだらうが、芝居で手紙を讀むに何時でも一つ何々と云ひ、琴責の場の阿古屋も何々の誓文と云ふアノ、何と同じ何で、唯だ何となく何を何したのサ何と分つたか。

五滑稽人事

九四

滑稽問答編者先生の容貌風采を問ふ

是は飛んだお尋ねで近頃恐縮でゲスネ、おはもじながら見出しの繪はオホン拙の寫眞でゲスよ、鼻の下が彼是と宣ふが、アレは長いのでは無く口の位置が低い迄サ、襟の高所など五分もすかない當世風に御注意が願いたいたテ、御兩君の御本名實は杉平何姫とか仰せられるのではゲーせんか是ツ非伺ひ度ネ。

九五

滑稽問答編者の生國と本名を御尋ね申す

オホン拙者の出生地は三千世界の外なる根無の國葉無郡實無村で、姓は種無名は權兵衛といふ、兎に角一匹の男で御坐る。

九六

辨慶上使の段に三十餘年の溜涙とあるが、何程位出でたるものか、流石の

編者も御存じあるまい

辨慶は久壽元年正月元日の生れにして、堀河御所より上使として侍従太郎の邸に罷り越したる時は三十三歳（文治元年二月十日）なり、其間の日数を算するに一萬二千六百八十餘日、平均一日に一滴づゝの涙を出すとして十二萬六千八百餘滴の涙なり、此涙一滴の量が米粒程あるとすれば七萬五千粒にて一升、乃ち辨慶の溜涙は一升六合九勺餘になる譯、大紋も袴もビシヨ濡になる筈。

九七 デタラ目とはどんな目でしようね

今度はデタラ目か、能くいろんな目を捜し出して編者を散々な目にイジ目るね、デタラ目とはマジ目の反對で、何事にも脇目を振り押目のきかぬゆ目同様な下らぬ事を言ふので逆も覗みのきかぬものと知るべしだ、ナニ此答へも可笑くないと、記者は役目の手前、慎んで答へて居るのじや、少々は大目にも見給へよ、なんだ夫れでも拙いッ

テ、エ、そね目く。

九八 女に目が無いの、慾に目が無いのと云ふ人あれども、人間は好きな者に出遇へば、全く目を失ふものによ

秋月弓之助の娘深雪を見給ひ「又も都を迷ひ出で、いつかは巡り逢坂の、關路を跡に近江路や美濃尾張さへ定めなく戀しく目に泣潰し」と好きな男の爲に目を失ひたるに非ずや、支那にても宋の時代鄙吝にして財を積むものあり、一夜盜賊に襲はれ、財を奪はんか眼を奪はんかと脅迫せられ、寧ろ眼を失ふも財を守らんと答へ、賊も其頑愚にして吝なるを憎み、兩眼を抉りて去りたり。

九九 駄目と云ふ目は今に見たことなしどんな目だらふ

言ふ目が出ぬときに駄目だと云ふから駄目とは言ふ目の凹んだものだ、ナニそんなら言ふ目とはどんな目だと、ヤ是れは飛んだ破目になつた、待てよ尋ねは駄目の事だけ

だから言ふ目の事なんか言ふめへ。

一〇〇 能く人が鼻毛を讀むと云ひますが、一體何と書いてありますか

鼻毛が長く延びてこんぐらがると、の、字ろの字の形に幾千萬と云ふ數限りなくとぐろを卷きます、之を一々丁寧に讀み分けて見るとのろくくくく、時々はまの字もあります。

一〇一 怒髪天を衝くと云ふことあり果して然らば其髪の長さ如何

髪の長さは白髪三千丈と承り居候、若し三千丈にては天に届かずと仰られ候は、髪の長さは丁度天の高さと同じこと、御承知爲さるべく候。

一〇二 眼は座つてる鼻はナゼ行儀悪く胡踞などと搔くんでせう

目は上にあるもの即ち目上の者は行儀が正しい、鼻は広い座敷の真中へ突き出されて物の臭ひを嗅ぐ外、別に左したる用事もないからツイ退屈で胡踞を搔くのです。

一〇三 口も八丁手も八丁といふ事あり斯く大きな人間がありますか
八丁どころが灸を据える所は足の三里ならずや、萬丈の氣焔を吐いたりする人間もあるものを。

一〇四 面の皮を引剥れると、耳が痛いと言ひますが、少々方角違ひのやうですが、如何なる理由によりますが

面の皮は十枚張の鐵面皮と云つて、中々丈夫に出来て居るから一枚や二枚剥かれた處がどんなでもありませんが、兩方の附根は耳で留めてあるから、一枚でもそれを引放す時に痛みます、それから目の處も深く折込んであるから、面の皮を剥かれると目から火の出る人もあるさうです。

一〇五 彼の人は中々腹が狼だといふ事あり、腹が狼なら手足や顔は何でせう。
腹が狼なれば目は熊鷹、鼻は大狗、手足の爪は鷲のやうで御座らう、斯ういふ化物が

多いので我々人間は始終生血を吸はれるのです、ナニ顔ですか、左様大概猫を被つて居るでせう。

一〇六 雷公は人の臍を抜き取つて、何にするつもりですか

雷公は元來身持の悪い男で、ゴロツキとなり、始終ゴロくして、着物も着たなりならまだしも好いが、残らず七ツ屋へ運んで素裸、それ故寒い時は何處へも出られず、夏の暑い時だけ飛出して暴れ廻り、若い時にお母の臍線を貰つて、旨い味をしめたから、何時でも人の臍ばかり覘つて居るといふ次第です、時によると太鼓を脊負つたまま、落ちるのです、イヤ是も親の撥當りでせう。

一〇七 雷に臍を取られると云ふ事あり雷鳴の烈しい時、編者は臍を取られはせざりしか

能うこそお尋ね下さいました、併し我々滑稽連には、どんな慾の深い雷公が遺て來て

魔風、戀風は天外から吹いて来たと言ひますが、東京中何處の河岸でも、葛西の兄イが乗つて居る船には、何時でもこひ風が吹いて居ります、そこで水上警察があつて水性者を取鎮めて居ます、お染風も其一種で、久松と云ふ男を惱ました、此節は海老茶袴の裾から、此風が吹き出すと云ふ評判、大學の角帽などは餘程用心しないと危険い、時も方角も定つて居ないで、不意撃を喰ふ事があります、何となく嫌あな臭氣があつて、葛西の百姓も避易するさうです、そこで昔から戀は臭ものサ、泥坊も何日何時、何方から這入るか分らないから、同じくくせものと申します。

一一三 戀の暗路に踏迷ふものが、昔から幾人あるか知れませんが、一つ奮發して瓦斯燈でも點けて遣つたらどうだネ、大層な功德になりやすぜ

イヤどうも彼處は大分危ない處でけしてナ、思案橋を踏外せば、下は無間地獄でけすよ、併し彼處でまご／＼するのは、水の出端の一盛りで銘々頭へ洋燈でも點すやうに

なれば大丈夫踏迷ふ事ありません、まああの儘棄て、置きませう。

一一四 一寸伺ひたい事があります、實は閣下の妻君になりたいと云ふ人が、一

ダース程轉がつて居ますが、閣下まだ獨身ですか、若し妻君がおるのなら、

此一ダースを鹽漬にでもして置きませうか、何分生物だから心配です、時節柄早く御差圖を願ひたい

イヨ一拙者の妻になりたい、それでこそ軍國婦人の心掛といふもの、感心々々、褒めて遣はす、併し拙者は昔から妻になりたいと申込む者が幾千萬人あるか知れんが、一人を妻にして其餘の希望を容れぬのも、偏頗に涉るから、思ひ切つて一切妻を有たぬ事にした、ア、男も餘り上出来に生れると閉口だ、夫故お手許にある一ダースも、佃煮のやうに煮詰めて置き給へ、折があつたら飯のさいにでもしやう。

一一五 親に似ない者を鬼子と申しますが、私の隣の娘は玉のやうな美人で、其

親は二人とも鬼のやうな御面相ですが、是でも矢張親に似ないから、鬼子と申しませうか

御質問になつたやうなのが即ち眞の鬼子です、鬼は即ち夜叉の事で、外面如菩薩内心夜叉といふ譬への通り、さう云ふのがお隣に居るとは實に小氣味の悪い話、早速御轉宅でもして、其鬼の瓜に罹からぬ御用心が肝要でせう、凡て子は親に似る筈のものであるのにそれが似ないとは普通の人通でない證據だから、鬼子と云はれるも據るない譯です。

一一六 拙者の娘乙姫は、龍宮第一の美人なるが何處の美人選舉でもどうしても出しませんがどうした譯でせう

イヤ是は恐れ入りやした、實は非常の美人と云ふ事を承はつて居りやしたが浦島の太郎殿を一旦聳にお取りなすつて、最早後家となつて居らツしやるのと又美人と云ふの

も見ぬ人の評判だけで實は普通に劣つた御面相ださうで、成程考へて見ればなみ（普通）の下ですからナ、眞平お断りになるも無理がないです。

一一七 能く眞赤な嘘といひますが、嘘にも色の區別がありますか、白い嘘とか黒い嘘とかいふ事は、聞いた事がないやうですが一寸御伺ひ致します

眞赤な嘘といふのは、如何にも眞實らしくして、其實至極念入の大嘘をいふのです、是は唐の玄宗皇帝が、安祿山に向ひ、其大きな腹の中に何が這入つて居ると聞いたたら祿山が是皆陛下に忠義を盡す赤心のみと答へた、然るに其後謀叛を起した處から始まつた語です、それから腹の黒といふ語もあり、黒白を裁断するといふ事もある、して見れば嘘にも色々あると見えます。

一一八 私の親爺は私を捉へて魂を入れ替ると申しますが、魂は入れ替への出来る者では無からうと思ひます、世間の人が親は無理を云はぬものだと云ひま

すが、是は少々無理の様に考へます如何御思召しますか

左様、是はお爺さんの云ふはうが道理です、ヤクザな魂なら早く好い魂と入れ替へて置いたはうが生涯何程徳用であるかは知れませんが、魂の出物は拙者の手許に幾個もゴロく轉がつて居ますから成可堅さうに確りしたのを十分働いて差上ませう、北條時宗、豊臣秀吉などの魂も私の手許に引取つてありますが、恐露病なんぞに罹つてた人で此魂を入れ替させて随分強くなつた人が澤山あります位で、至極効力があります、然しどの魂でも酒と女に懸けてはドロく融けて了ふので閉口します。

一一九 元老とは如何なる資格を具ふる人物なりや

元は『蜀山兀として阿房出づ』の兀の字の上に一の字を加へたるものにて、秃頭の上に一本位の毛ある者を云ふ、あはうと相離れざる關係あり、老は無論老耄の老なり、されば老耄して秃頭の者は元老の資格あるものと御承知あれ。

一二〇 度膽を抜る、といふ事は人々能く云ふ處なれど、實際膽を抜かれては生

きて居られぬ筈ですが、平氣で談話をするのは如何なる理由なるか

是は本行經といふ經文から出た故事なり、昔海中に牝牡の龍あり、牝龍懷妊して猿の生膽を喰はんことを欲し、牡龍に之を取り來れと命ず、牡龍承知して所々尋ね廻はる内、海岸に差出でたる木の上に猿の居るを見付け、甘言を以て欺きて曰く、海を隔て、彼處に島あり栗柿其他の果物累累として木に滿つ、汝之を欲せば我背に上れ負ふて彼處に至らんと、猿大いに喜びて其厚意を謝し、何の思慮もなく龍の背に上る、龍は猿を背に載せたるまゝ、水上を泳ぎ、沖中に至りて曰く、果實ある島に連れ行かんとは偽り、實は我妻汝の生膽を抜いて喰はんと欲し我計を以て誘ひ來れるなり、最早泣いても怨んでも力及ばざれば、念佛を唱へて往生せよと、猿も此事を聞いて吃驚仰天是は大變と思ひしが、俄かに一計を案じ、沈着拂つて、貴方の御家内に差上る生膽な

れば、少しも惜いとは思はぬ、こんなケチな山猿の生膽でも、お役に立てば、冥加至極の事なれど、如何にせん我は大急ぎにて、貴方の背に飛び乗りし故、大事の牛膽を木の枝に掛け置きたるまゝ、忘れて來たり、早く元の處へ返して呉れなば、謹んで献上すべしと云ひしに、牡龍も道理と承知して、再び元の岸へ泳ぎ着きしに、猿は一目散に木の上に駆け登り、生膽は何時でも體の中にある、取つて木の枝に掛けらるゝものにあらずと、牡龍を嘲弄したれば、牡龍は齒噛みをなして怒れども詮方なかりしと、膽を抜くといふは此事より出しものと覺ゆ。

一二一 下駄の齒と云ふが何んにも噛む事出来ぬではないか、他に之に類した齒がありませんか

ありますとも齒は必ず噛むものと極つて居りません、まづちよいと噛めぬ齒を舉げて見ますと鋸の齒、鳥の羽、山の端、松の落葉、草木の虫喰葉、きらきら光る白刃、深

川の木場、波よけの亂杭場、兵隊の喇叭、川に河童、不具のちんば、お米の相場、娘のおてんば、菓子金の金つば、櫛の齒、墓場の搭婆、臨終の急場、小便場、宗派、黨派、まだまだどれだけでもあります。

六 滑稽動植物

一二二 野呂馬とは如何なる馬なるや

野呂馬は頓馬、ハン馬、屁馬、など、同種類にして、産地も同じ日長の國、盆槍郡智恵内村の野原に産殖す、其毛は即ちマヌ毛、フヌ毛にて、何の役に立ず、外に彌次馬と云ふ馬あり、何事にも騒ぎ廻り、向ッ氣つよく持餘しものにて、外見は野呂馬と同種類とも見えざれども、系統は矢張り相同じ、

一二三 彌次馬ありて喜多馬無きは如何

彌次既に馬あり、其棒組たる喜多公豈馬なからんや、されども喜多公の素性は元來駿州府中のかゲマなり、蔭の馬故終に表立て見えす随つて彌次馬のみ人口に喧傳せらるゝに至りしなり。

一二四 おてん馬と云ふ馬は多く何處に産するや又時節がら軍馬などには用ゐられぬにや

馬の産地は南部や鹿兒島と云ふが、アレは少し間違つて、よ、おてん馬の産地はネ、南部は喃婦の書違ひで、鹿兒島と云ふのは女護島なのよ、ホラ本郷や小石川や神田邊に彼地此地女護島があるでしよふ、産地はアソコなのよ、色毛は海老茶でネ、きやツくと嘶なく聲は生嚙りの英語の様だワ、あんな跳ツ返りで軍馬になるものですか、ナニ名馬痴漢じや無くツてよ、驚馬の癖に才子でも學者でも跳ね落すのよ、貴女見た様だツて、アラよくツてよ。

一二五 頓馬と稱する馬は如何なる形狀にて何處に住む動物なるや又マヌ毛とは如何なる毛なりや及び其用法を問ふ

善い序じや同時に答へやう、頓馬は半馬と同種屬の馬で、其毛がマヌ毛じや、形狀は目尻が下りて鼻の下が伸びて居る、能く世人がマダ青いと云ひ、甘いと云ふゆへ、マヌ毛の色は青で肉は甘ひものと見える、歩行は至つてのろく大抵の事は荷が重くて背負切れぬ、毛の使ひ途も更に無い偶にモツ毛と云ふて一筋くらゐ役に立つものもある、モツ毛の幸ひと云ふのが是じや、此馬は何處にも居るが重もな産地は魯國じやけな。

一二六 瓢箪から駒が出ると云ふ諺あれども實際出ますか

此妙藝は拙者の曾孫に當る曾呂利新左衛門が太閤秀吉を驚かした一藝、拙者の目から見れば至極ツマラヌものだ、其法は人に知られぬやう、駒を極々細い毛で縛り口の太

きな瓢ひょうに入れ、毛けの端はしを指さで押おへ、人ひとの前に持も出して、さてこのなか 諸もろ此この中なかから只ただ今いま駒こまを引ひ出して御ご覽らんに入いれますと口こう上じやうを云いひ、チ、ツン／＼と口くち三さん味み線せんの調てう子しに合あせ、ソロ／＼駒こまを引ひ出すだけサ、駒こまですか、駒こまは三さん味み線せんの駒こまでも、將しやう棋ぎの駒こまでも合あ有あせのもので好よい。

一二七 ものうしと云ふ牛うしは如何いかなる動どう物ぶつなるや

ナマケモノと云ふ獸けものに屬ぞくして、モノグサと云ふ草くさを喰くふ、始しじう終じゆうぶらぶらして居ゐて職しやく業げふを勉つとめず、傍かたはらの者ものが學がく問もんなり仕し事ごとなり勉べん強きやうして、安あん樂らくに暮くらす様やうになれば、はたらく／＼と羨うらやましがる（はたらくは傍の者が樂になつたと云ふ事）併しかし鞭むち撻たつしてギウ／＼と云いふ目めに遇あはせれば、モウ／＼懲こり／＼したと、稼かせぎ出だす事こともある。

一二八 よく兎とに角かくと申まをしますが兎うさぎに角つのがありますか何なんれの地ちに居ゐりますか博はく學がく多才たさいの間ま拔ねに伺うかひます

間ま拔ねとは飛とんだ御ご挨拶あいさつにて、少せう々くつ角つのを生はしたくなり申まを候せう、さてしやう 諸もろ詩し經きやうにも誰たれか言いふは雀すずめに角つの

なし、と有ありて雀すずめにさへ角つのはあり細さい君くんにも折せり々くつ角つのが見みへ、亡まう者じやにも角つのあるは角つの隠かくしをもち用もちる候もちにて明めい瞭れうにて候もち、其そ他た地ち角かく、海かい角かく、窓そう角かく、屋やく角かくおまけに風ふう角かくと申まをし風かぜにさへ角つのがあるやに候もちへば兎うさぎの角つのくらい不ふ思し議ぎに無な之これと存ぞんじ奉たてつり候もち、産さん地ちは宇う都つ宮みや、宇う都つ宮みや峠たうげ等とうにてウツノは兎う角つと愚ぐ考かう罷かり在あり候せう折せつ角かくのお尋たづね故ゆゑ早さう々くつカクの如ごとくに候もち、頓とん首しゆ。

一二九 挺てい鶴かくと申まを鳥とりは何なんれの地ちに産さんするや

是これは鳥とりの名なにあらず、お出で額ごで狡ずる猾るい女んななれば、容すがた姿たも心こころも兩ふたながら取とり柄えのない、シロモノにて實じつに厄やつ介かいなるより、斯かる女んなをデコズル／＼と惡あく口こうせし爲ために此この語ご流りう行かうせしなり。

一三〇 鳥とりが卵たまごより生うれ、鳥とりが卵たまごを生うむ、兩りやう者しや何なんれが先さきに生うれ出でしや

太陽たいやうは東ひがしより出いで西にしに入り、又また西にしに入りて東ひがしに出いづ、出いるると入いると何なんれが先さきなるや、此この反はん問もんに答こたへ得えば、編へん者しやも直ちちに貴き問もんに答こたへん。

一三一 鷺に五位の位あり、他にも位階を有する鳥ありや
 雲雀を告天子と云ふ、此上は無かるべし。

一三二 羽のなき鳥を知つとるか

知らないと云つては私しの枯券にさわります、何んでも知らな、ものなし、少しばかり舉げて見やうか鍋の鶴、跡や鷺、奇妙不鳴、堪忍袋、跣跡で鷺、五日も十鴨、鰯に鷺、取つかか見鷹、膝を雀、野から山雀、濟したから最うかりがね、飯を水雞、嫁が邪見で家内鷓何んと何んでも知つてらだらう。

一三三 矢鱈と云ふ魚の産地及び調理法の答へを命ず

イヤに威張る奴が來やがった、イエ何に當方の事で、ヘイ〜早速お答へ申します、併し矢鱈とは困まる、ドーシタライ、か、コーシタライ、か、おや四タラに四タラで八タラになりました、イヤ其れでは魚にならぬと仰しやるか、成程去らば、個様で御座

る、俗語にムシヤウ矢鱈と云ふのが矢鱈の産地で、支那楊子江岸の武昌と云ふ處が矢鱈の本場であるから武昌の矢鱈々と云ひ遂にムシヤウ矢鱈となつた譯で御座る、又矢鱈は煮ても焼いても食へぬものゆゑ、調理法は無いこと、御承知を願ひたい。

一三四 鰻とアナゴは淡水魚と鹹水魚の別こそあれ、形成の相似たるは何か因縁ありや

兩者元同一の種類にて、河と海に立別れしより、追々形状、色も少しく異なるに至りしなり、其證據はウナギとアナゴの名稱を比較するに、ウ、アは同じくあ行の音に屬し、キ、ゴ、は同じくか行の音に屬し、彼此相通するを以ても知るべし、又ウナギの名の起原に就て一の考證あり其昔鵜が水中に潜りて此魚を啄み上る毎に嘴に纏ひ頸に巻付き、鵜が難儀するより鵜難儀〜と名づけしが、促音にてウナギとなりたりと。

一三五 泥水に住む魚を釣る法を

凡て泥水に住む魚を釣るには、蛭子様の書いてをる紙片を餌となす、蛭子様は釣師の開山と崇むる神様なれば、其靈驗顯著なり、釣糸は鼻毛を幾本も繋ぎ合せ手連手管に捲きて紡ぎ、竿は節無し竹を用る、ウキは有頂天然の桂の木にて製すべし、尤も泥水に住む魚は尋常の魚にあらずして、海に千年川に千年の劫を経、不思議の通力を得たるものなれば、釣らうくと思つて反對に釣り込まる、者多く徒らに餌を喰はれてしまふなり、努めく野心を起し給ふな。

一三六 蛙の種類多く知ると雖も未だ呆れかへると謂ふ蛙を知らず其形は如何にて棲む處は何處ぞ

呆れかへるはもと我田に住んで水を引かへるだが慾張つた事をかんがへると爲つて呆れかへるといはれるやうになつたのであやまつ田に住み替へて両手を地びたについて伏目がちにべそ口をして居るもの田。

一三七 弱虫と云ふ虫は如何なるものなるか

泣虫の一種にして、何事にもビクくするより弱虫と呼ぶ、一體虫は露を喜ぶものなれども、此虫に限り露といふ字さへ恐れ、人身に寄生すれば、其人必ず恐露病に罹る事、恰かも狂犬に咬まれたる者の恐水病を起すが如く、殊に多く藤、桂などに發生す、兜虫、鎧虫などは此虫と大の仲悪なり。

一三八 梅の木に鶯、竹に雀、ステツキに月給鳥と相場が極まつて居るが、トウ、ヘン木といふ木には何鳥がとまりますか

一體トウヘン木などにはサトリと云ふ鳥は決して來ず、ユトリも見へず、シツトリと云ふ鳥も居らず、何時でもウツトリ、其のくせキドリ、何事にも引けをトリなどの鳥ばかりで、逆もトリ所はないとのトリ沙汰だ。

一三九 僕は此頃動物學を研究し、人間は足のない高等動物と云ふ事を發見した、

何の事が解るめい

動物學を研究したと、大さう高慢ぶるから、何の事かと思へば、下らない話で呆れ蛙のおツピヨコピヨイだ、人間は足の無い動物とは、貴公等の連中に限ること自分で無いから他人も無からうと思つて居るなどはあさましい、一體貴公等は禪宗に歸依したのでお足が失なつたのだ、古い歌にも「達磨大師におあしを貸して、ゆけどもく返しやせぬ、大きな目玉で睨めつけ、達磨さんにおあしがあるものか、しらんくく」とある通り、どうも此宗門の人はおあしが無いので鼻つまみだ、昔から百兩の金を一本と云つて、千兩が十本、萬兩が百本、編者などは何萬本の足があるか自分に分らない、其上利足といふ奴が、毎月殖へるから、阿部様の亡者が百足のお使見たいにお足の多いのを持て餘して居る。

一四〇 海に千年川に千年と云ふ動物は如何なるもので

莫連と云ひて、下腹の毛の無き怪獸なり、多く泥水に棲みて、人の鼻毛を數み髻毛を抜く、其聲嬌柔にして猫の如くなれども、爪先鋭く、バラガキの本態を現はす時は頗る恐るべきシロモノなり、或ひは云ふ白面金毛九尾の狐の分身なりと。

一四一 驚板と云ふ板の産地効用を問ふ

驚板はオドロ木と云ふ木にて、ピツクリ國オヤ／＼州に生ず、此木にて下駄を作りしを玉下駄と云ふ、浦島太郎が龍宮より持參せし玉手箱も此板にて作り、開けて見て吃驚したり、されば龍宮にて種々の箱を作るに用ふると見ゆ。

一四二 やり栗の産地及び味ひを問ふ

やり栗は最も多く見掛田山、儘野川等に産す、容易に甘いのは無く皆一種の辛味あり之を世智辛いと云ふ、シ、喰つた跡には此やり栗を喰はざる可からざること多し。

一四三 金のなる木と云ふがありますか

かた木、はたら木、など澤山ありますが、培養法が中々むづかしい、又缺で貯金々々と手入れをしなければなりません、併し早手廻しには、御寺の坊さんに頼んで一本貰つて来れば造作もない、それはどんな木かと云へば撞木で、是も矢張カネの鳴る木ですが、餘り効能がありません、平沼さんや大倉さんなどは、アコ木といふ木に金を澤山生らせ、所謂生り上り分限になつたのです。

一四四 ホラ路の産地形状使用法を問ふ

ホラ路は根無しの國音計郡出鱈目村の吹立山中に生ず、其の幹の長大なる上は蒼穹を貫き、下は奈落の底無間地獄に入る、葉は風呂敷に代用して奈良の大佛八億以上を包むべし、使用法は別になし實に無用の長物なり。

一四五 喧嘩に花が咲くと云ふから、何れ植物でせうが、何處に生ずる植物で、

どんな花が咲き、どんな實が生りますか

喧嘩ズ木といふ木で、ムカツバラと云ふ原に生じ、根のあるのと根の無いのと二種に區別し、花が咲くと實に厄介なもので、其癖實は一つも生らず、培養しては損害ばかりで、更に利益になりません、其木を以て亂棒といふ棒が出来ますが、皿鉢を叩き毀すには至極妙です。

一四六 根も葉もない樹の名を知つて居ますか

そんな事知らいでは滑稽學校の教授ができません、一寸舉げて見ると金かい、別品の白い桃、驚愕くり、氣をもみ、のこきり、最早ひるすぎ、はちかき、口から出るつはき、農具のくは、牛肉やかいは、金がない、力でうごき、發句はばせう、頭のけやき、等どれだけでもある。

七 滑稽衛生

一四七 安本丹と云ふ薬は、何處にて賣捌き居り候哉、併せて其効能を問ふ

安本丹は支那の頓馬縣白獅郷馬鹿方にて調製販賣致し、東京にても間拔屋鈍作受賣仕候、効能は利口者を愚鈍にさせるだけに候へ共、一體世の中の厄介者と云へば、利口にて、孔子も利口邦家を覆へすと申され候、此節は八字髻杯を捻つて小むづかしい理窟を捏る舶來の利口が追々殖えて閉口の折柄、此安本丹を澤山仕入れ、ドシトシ大安賣を始め、利口退治を致し候はゞ、實に香氣至極の安樂世界と相成可申と存候、即ち安樂の本なるを以て安本と名づけ候事と思はれ候、委細は一服御購求の上効能書によりて御承知被下度候。

一四八 安本丹と云ふ薬の製法を聞きたし

安本丹は唐の横町鈍馬屋にて賣捌き居り候、序に此薬の製法を一寸御知らせ可申候、御自製に相成り候らへば別に遠方より御取り寄せにも及び間敷候、儲其製法はまぬ毛ふぬ毛と申す二種の毛を黒焼に致し、氣の抜けし酒に浸し、掌にて丸め候らへば宜しく候、支那朝鮮にては之を服用する者甚だ多く、追々我國にも輸入致し候様見受けられ候、本薬を手製にて始終持薬に致され候らば、効驗モルヒネと同じく、一種の麻酔薬にて之を吞めば神經鈍く眠氣を催ふし人に頭を擲られ足蹴にされても、一向平氣にて痛癢相感ぜざるは奇妙奇的烈に御座候間、其御心得にて御服用可被成候頓首。

一四九 馬鹿に附ける薬の名及び其製法を問ふ

馬鹿と云ふ病氣は先天的不治の病で、中々癒るものではありませんが、先づ一通り其薬方を教へませう、之を服用すれば幾分か輕快に赴きます事、屹度受合申さざる故其お心算で……先づ教育丸だの何だのとむづかしい薬もありますが、何より特效のある

のは黄金劑即ち金です、これさへあればどんな馬鹿でも伶俐さうに見えます、さて其製法はと云へば三角の法と申して、義理をかく、耻をかく、汗をかく、さうしてドシく稼げは必ず此妙薬を得られます。

一五〇 ハイカラ病は全く流行性だと思ひますが、なぜ隔離病室へ收容しないで置くでせう

たゞの肺病でさへ人の恐れるのに、其肺が虚になるのだから恐ろしい病には違ひありませんが、古來酢豆腐と云つて日本にも澤山あつた奴で、舶來の名前を附けたばかりだから、人が夫程に恐ろしく感じません、併し其内オホンと嫌な咳拂をする奴は、何とか方法を設け隔離する事になりませう。

一五一 口止めをするに鼻薬あれども、人目を防ぐ薬ありませぬか
鞍馬山に生づる胡麻化草を探りて、人目に觸れぬ處で陰干となし、服用して御覽なさ

い。奇妙に効能ある事屹度請合。

一五二 放屁一發は藥三服の價値ありとの古語あり右は何病に對しての事なるや抑も放屁の効能は昔からいふ如く「屁放つて三つの徳とりお腹が空て、氣が晴れて、お穴の埃を吹き拂ひ……」といふ譯なれば第一は胃病第二は精神病第三は皮膚病の藥に代用するの効能あること明なるにあらずや。

一五三 自腹を切るのと頭割とは、孰らが苦痛を感じる事少きや
自腹よりは頭痛の方幾分か苦痛が少ないやうに感ずるが、つまり五十歩百歩で懐を痛めるは同じ事、成るべく引退つて無事で居るはうが宜しい、併し其時は無難のやうでも、後で面の皮を引剥かれる事もあるから、巧く見計らつて逃げ給へ。

一五四 能く人が片腹痛えと云ふでがせう何方の腹が痛えでがせう和尚様に聞いたが分からんねえだお前さんはなんでも知つてござるちうが右か左か何方だ

是れヒヤーゑらく六かしいこんで俺も知んねーだから向ふ横丁の交番で聞くべえ思つて驅ん出したら流石にお廻りさんだ俺の聞くことチャンと知つて御座つて遠くからデケイ聲で教へて呉れたよ、左！ 左！

一五五 能く人が命の洗濯と申候らへ共、自家にて洗濯致し得るものに候哉、西洋洗濯屋にても依頼致すものにや、見本に洗濯済の命を拜見致度候らへ共、何れに申込んで宜敷や、御手数ながら一寸御教示被下度候

西洋洗濯などの贅澤を云ふに及ばず、自分の手で造作もなく出来るものなり、尤も洗濯は湯か水が無ければ決して出来得るものにあらず、命の洗濯は衣類と異なりて金銀を湯水の如く遣ふなり、金銀の用さへ欠けぬ人ならどんな上等洗濯でも差支へなし、見本も何もあつたものにあらず。

一五六 呼吸は口と鼻にてするものなるに、肩で呼吸をすると云ふ事あり如何口先で太鼓を叩く人、尻に帆を懸ける人、尻で餅を搗く人、臍で茶を湧かす人、額で蠅を追ふ人、腕で振を懸ける人、爪で火を點す人、疝氣を頭痛に病む人、腹で藝を演る人、肱で鐵砲を放つ人などある世の中に、肩で呼吸をする位左程不思議にもあらざるべし。

一五七 梅毒と云ふ事は聞及べども櫻や柳に毒あるを聞かず其理由を問ふ美しい花には何でも毒がある、柳にも毒がある、されば一口に花柳病と云ふではないか、梅は百花の魁としてあるから、先づ第一に之れを擧げれば、其他は云ふに及ばない、娼妓を花魁と云ふも、即ちこの道理、諸君決して近寄り給ふな。

一五八 毒なもので常に用ゐて差支ないものを聞かせて下さい
中々能い御心掛けです直様知つて居る文教へませう、然し考へて見ると中々六ヶ敷い

注文ですエーエーツト思ひ出しましたまづ施し物の功毒、見るは目の毒、肩を揉ん毒、仁者の氣毒、破れ物を接毒、書物の音毒、水を汲ん毒、其は氣の毒、炭俵をつん毒、繻物をあん毒などです。

一五九 餘計な世話薬と云ふ薬があるが何で印紙を貼りませんか外にこんな薬が
ありますか

面白い事を尋ねますナ、御望みなら何でも答ひますが、印紙を貼らない薬はどれ程でもありません、官吏の鼻薬、馬鹿の安本丹、洋書の翻薬、花壇の芍薬、鼻が嫉妬薬、鼻糞の丸薬、俳優の立薬、消防の貌薬、非常の儉薬等で中には印紙を張る處かあべこべに蛭子様のついた印紙が澤山舞込みます。

一六〇 『吐いた口へ牡丹餅』といつて吐く時に牡丹餅を喰へと云ふ事があるが其れに類した事がありますか

面白いのが澤山あります、風邪氣の者は旅行すべからず『鼻風道中がなるものか』血の道は蛇を煎じて飲むべし『血の道は蛇』人淋病となればかせぐにしくはなし『かせぐに取り付く淋病なし』咳逆は落付き充分に養生すべし『咳ては事を仕損す』の類なり。

八 滑稽飲食物

一六一 周章狼狽する事を粟を喰ふとは如何

日本人は米を喰ひ、西洋人は麴包を喰ひ、支那人は昔は多く粟を喰ふ、殷の紂王が暴虐至らざるなく、天下の諸侯悉く離畔せし時、周の武王檄を傳へて兵を徴す、諸侯之れを讀むや否我もくと先を争ひ取る物も取敢へず武王の麾下に集り、遂に紂を亡ぼし、各々其功によりて食祿を保ち即ち粟を喰ふことを得たり、獨り伯夷叔齊武王の命

を奉ぜず、周の粟を食まずと稱して首陽に餓死せり、周章の字義も武王の檄文を指したる者にて、即ち周の廻章を約めたるなり、如何なる漢學者も、此の考證には手が届かぬやうなり。

一六二 海老茶と云ふ茶の味ひ、代價、茶取及び使用法を問ふ

こんな問はお茶の子じや、海老茶は番茶も出花と云ふ番茶で古くなれば酸苦茶と改稱する程だから出花に限る、味ひは甘いのも多いが苦々しいのが多い偶には酸ばいのもある代價は大抵ハツエンでヂユウエンは少なく茶受には胡麻菓子、焼餅、臍栗などよく、耻柿、冷菓子等は禁物なり諸使用法は甚だ少ない老人其他大切の客には出せないが書生客には此茶に限る六かしい談判の相手などに出してお茶を濁す事も出来る。

一六三 緞茶は一體どんな味がしやすネ、そして産地は宇治だんべいか、狭山だんべいか、ちよツくら聞きてへもんだ

緞茶の原料は宇治狭山に限らず、日本中何處でも出来やすが、其製法は東京に限りやす、地方でも少々位製造しやすが、どうも日向臭くつて可げやせん、元は本郷のお茶の水邊で盛んに製造しやしたが、今ぢやア小石川でも負けずに製造しやす、戀風が吹くと蟲が附きたがるもんで實に困りやす、味は甘ツたるい調子で、角帽の書生さん方が召上ると、身體麻痺して勉強の妨けになりやす。

一六四 粉にして捏ねて熱湯で茹で上げたものを生蕎麥とは何處に生きた處があるか

蕎麥は信州が名物だから、其昔看板に信州蕎麥と書いたところ、御幣擔ぎの多い江戸の事で、死ぬ、しくじる、始終仕合せが悪い、身上を仕舞ふと、シの字は縁起が良くないと大に嫌ふ處から、シの字盡しの信州の代りに、生るといふ字を用るるやうになつたのサ。

一六五 編者は杉森の御馳走といふ事を知るめへ

知らないでどうする、杉は三木(多に三に通ず)即ち御酒又日本にて酒を造つた元祖は
 大己貴命、少彦名命の三神で、和州三輪の社に祀り、此神は大さう杉の木を愛す
 ると云ふ處から、酒屋の目印に杉の葉を吊して置く、極樂を何處の里と思ひしに杉葉
 立てたる又六が門』と云ふ歌も此の理窟だ、次に森は盛蕎麥の略で、杉森と云へば酒
 に盛蕎麥、何と驚いたらう。

一六六 『彼奴は煮ても焼いても食へない』とは能く世間で使ふ語なれども、人間

は食物なりや、若し食物なれば肉類拂底の今日牛肉などの代用として如何
 支那人の記する處によれば西域に飛頭蠻あり、夜間頭顱脱け出で、他人の熟睡を窺ひ
 之を啖ふと、所謂轆轤首の元祖、又南洋の蠻人に食人種族あり、現今の東京に於ても
 娘を食物にして左團扇で安樂に暮す親あり、面喰ひ男あり、親の脛を嚙る息子あり、

意外手を喰はされたと云ふ者もあり、其味は容貌風采を一見すれば別る、間拔さうな
 奴は甘い、苦勞したような奴は酸い、吝さうな奴は澁ひ、是で人間は食物なる事正に
 判然と分りしならん、猪牛肉の代用如何と云ふに至つては沙汰の限り、以上人間を食
 物とする者は何れも社會の厄介者のみなれば悉く禁止せねばならぬ。

一六七 夫婦喧嘩は犬も喰はないといふが、其れでは何が喰ふものなるや

元來夫婦喧嘩と云ふものは、喧嘩の性質なきものにして、痴話が高じて遂にお互にス
 ネて見たり怨んで見たり、其れが段々強くなるまでの事なれば仲裁に入るものはい、
 面の皮である、妾も其んな積りではなかつたけれど、誰さんがあんな事を云ふもんだ
 からと女が云へばオレも一寸からかつたのだけれど誰君が居るから意地になつたのだ
 と、互ひに打解けては仲裁人を恨む様になるので、一睡の夢に中が直るものなれば、
 差し向き此喧嘩を食ふものは夢を好きな獾であらう。

九滑稽珍菓

一六八 アーメンの製法、及び其味、其價を問ふ、此物は素麵など、何等かの關係ありや

餛飩や素麵は小麦の粉で製し、蕎麥は蕎麥の粉で拵へますが、アーメンは米で作ります、其證據は八十八と云ふ人が拵へ始めたので八十八は即ち米の字です、其を後世下の八は端數だと云つて八十としてしまひ、何時か字迄間違つて耶蘇と書きますが不證索な話ではありませんか、尤も蕎麥屋の看板も以前一八、二八などと書きましたのが、今では無くなりましたと同様アーメンも八の字が消えて十の字だけ看板に残し、例の十字架を盛に振り廻します、價も昔は八十八文のものが今は嘘八百と申して殆んど十倍の騰貴、味は胡麻菓子に似て餘り旨いもんではありません、夫故近頃は此麵を

餅に搗き直して、ユニテリアンといふ餡を入れて賣捌く者もありますが、これは新しいだけに一寸オツです。

一六九 焼餅の製法を問ふ

至極容易なる事にて、何處の細君でも御亭主が夜泊りがけに遊び歩けば屹度製造して置く事請合なり、製造法は別に説明するほどむづかきものにあらず、誰にか焚き付けられて椿木と云ふ木を燃せば忽ち焼けるなり、之が爲め屢々手を焼く亭主あれどもトイのつまり犬も喰はぬ持て餘し物なり。

一七〇 コーリ菓子とは如何なる菓子なりや

こんなものは知らない方が好いが、折角のお尋ねだ答へやう、コーリ菓子はアイスクリームと云つて、冷たいく冷酷と云ふ程のもので、一寸口當りは甘い、跡がわるい、之を喰べると赤痢と類似の痢病に罹つて、腹を下す、懐を下す、特效薬は黄金湯

の頼服たんぷくより外ほかは無い、慢性まんせいになれば先づ全快ぜんくわいの見込みこみなした、初めはじめから喰たべぬに限かぎる古ふるいく洒落しやれのコーリくしたと云ふは、是これが始はじめまりだ。

一七一 夏菓子屋なつくわしやと云ふ店みせは冬ふゆは何なにを賣うつて居ゐますか

夏なつだけ菓子くわしを賣うるので、冬ふゆは其そのの仕入し入れの爲ため買入かひいれるばかり、長ながい間あひだ夏なつを待まちつて居ゐるので之これを『ふゆかい』と云ふ、やつと時節じせつが來きて店みせに人ひとが來くるそこでヤレ夏菓子屋なつくわしや。

十滑稽法律

一七二 甲女かみぢよあり乙某おつぼうを眼めで殺ころせりと云ふ、刑法けいはふの適用てきやうい如何かん

嬋媚せんけん二八にがいはのぢよ誰家女てんのしや。一轉秋波しゅうは惱殺なうさつ人と云へる詩しあり。秋波しゅうはとは何なんぞ、腰間えうかん三尺しやくしゆう秋水しゆうすい横よこと云ふ句くに據よれば矢張やはり刀劍類たうけんるいならん、果はたして然しからば物騒ぶつさう千萬はんなる兇器きやうきと云ふべし、惱殺なうさつ罪つみを構成こうせいするに十分ぶんの材料ざいれうなり、されども甲女かみぢよは無心むしんにして乙自おつみづから惱殺なうさつを遂とげし

ものか、或あるひは有心いうしん故造こぞうにして乙おつを惱殺なうさつし、其生血そのいきちゆうを吸すはんと欲ほつするものなるか、二者しや罪つみに輕重けいちゆうあり、前者ぜんしやは斯かる兇器きやうきを所持しよぢするの罪つみありと雖いへも、固もとより殺意さついあるにあらざれば唯危たひ險物けんぶつ取締規則しよじりきそくによりて處斷しよだんし、乙某おつぼうも遺族ゐそくの私訴しそを待まちて、其賠償そのばいしやうを爲なさしむべし、後者こうしやに至いたりては刑法けいはふ第三千五百二十一條だう『男をとこの魂たまひを奪うばふ目的もくてきを以もつて、豫あらかじめ謀はかり惱殺なうさつする者ものは金屋終身きんをくしゆうしんに處しよす』の條文じゆうぶんによりて處斷しよだんすべきものなり。

一七三 甲男かみだんあり、其友人そのいうじん丙丁へいていの面前めんぜんに於おて乙女おつぢよに脇撃わぢげつ砲ぱうを放はなたれ面目めんぼくを毀損きそんせられたり、然しかるに甲男かみだんは友人いうじん丙丁へいていを證人しやうにんとして告訴こくそに及およべり、刑法けいはふの適用てきやうい如何かん

脇撃わぢげつ砲ぱうは婦人ふじんの護身銃ごしんじゆうにして、無暗むやみに放はなつべきものにあらず、乙女おつぢよが甲男かみだんに向むかつて之これを發射はつしやせしは甲男かみだんに於おて何か無理むりなる要求えうきゆうを爲なしたるに由よれり、乙女おつぢよ其暴慢無禮ぼうまんむれいを奈い何なんともし難がたく、正當防禦せいだうぼうぎよの手段しゆだんに出いでたるものにて、甲男面目かみだんめんもくの毀損きそんは寧じしろ自ら招まねき

し禍なり、丙丁二人は其現場にありながら乙女をして自衛上斯る手段を執るの止むを得ざるに至らしめしは、甲男の悪を助長して乙女を誣るものと推定し、無論證人の資格無し、因つて刑の適下までに至らず、此告訴は却下すべきものなり。

一七四 質を置いて期日がくると流れるといふは如何に

百人首天智天皇の歌に『九把置きし汀の薪二把残り七把流れるく』といふがあれども、开は要領を得ざる歌なり、元來後生大事にするものを、詮方なしに質に置いて何とかして受け出さんと思へども、工面が悪くて出来ず遂に品物を没収されて仕舞ふ者になれば、措しさと悲しさで涙が流れる、此れを江戸つ子の氣性として質で涙が流れる杯と云つてはゲイブンが悪い爲めに、涙を略して質が流れるく。

一七五 菓子のカルメラとカステラとの間には何か貸借上の關係あるか

食物の中には勿論賣買やら貸借やら種々關係がある鮎の鹽辛がウルカと問へば支那料

理がカウヨと答へて賣買の相談が初まる、ウルメと云ひ貝と云ひ賣買が成立つ菓子と云ふ烏金貸が威張るとカリン糖と抗辯すると云ふ有様で、カルメラは御承知の通り中に穴が多いので何でも穴埋めにと思ひ山吹色でギツシリ満ちて居るカステラから借金したのだ、でチト卑陋だが仕舞にはけつぷで返すこと、なる次第さ。

一七六 借主、貸主に向つて曰く、月末には屹度耳を揃へて返済致しますと、さては金にも耳ありや

神通自在の金には、耳あり目あり口あり、金目に絲を付けぬ、目腐れ金等によりて目あるを知るべく、金貸が算盤を以て彼が一口、此れが二口と勘定するを見れば口あり、又金が物を云ふ世の中とも云ふ、魯褒は錢神論を著して脛無くして走り、翼無くして飛ぶと云へども、利足の附くことあれば脛もある筈、随つて耳もあるならん。

十一 滑稽相場

一七七 嫁五兩と昔から相場が定つて居ますが、婚がねは何程ですか
昔は女は三從七去の教へあつて、中々やかましいもの、容易に辛棒が仕切れないから
嫁に行く時母親が堪忍袋を肩に懸けさせ堪忍が第一だぞ、どんな事があつても歸つて
来るな、此袋を母と思つて辛棒して居ろよと云つて遣つたものだ、そこで嫁は姑に苛
められ、辛い切ない事があつても、此袋に對して堪忍しなければならぬ、母親の事を
お袋といふもこれから始まり、又堪忍は五兩と相場が極つて居るので、五兩の袋を懸
けた嫁だから嫁五兩サ、次に婚がねの直段ですが、是はずつと廉い、糠三合持つたら
婚に行くなと云ふ位だから殆んどロハ見たいなもので、何とも早直の付けやうがない
それだから婚がねの相場と云つては別に極まつて居ない、尤も一人娘に婚八人など、

餘り糶賣が行はれたので、斯う直段を崩してしまつたものと見える。

一七八 三文の直打なき男も、裸百貫とは算盤に合はぬ勘定なり、右の理由如何
君はまだ岡山縣高等女學校の裸體問題を御存じなきや、通常衣服を着て居れば一山百
文の田舎式部、何の評判も聞へざれども一たび衣類を脱すれば、日本全國の大騒ぎと
なる、醜業婦の裸體寫眞でさい中々直打者であるさうですから、まして眞物の裸體な
ら久米仙人でさい雲を外します位、されば男子も亦裸體となりて俄かに價を生じたる
ならん。

十二 滑稽器具

一七九 ひょうろく玉とは如何なる玉に候哉御教被下度候

ひょうろく玉は露兵の彈丸なること随つて轉じて他人を罵しるの語に用ゆることは學

者の異議なき所に候、併し露兵の彈丸と申候には解釋上左の三説有之候。

第一説 ひようは軍兵、雜兵の兵にて露兵を指す、ろくは碌々又はろくでないのろくなり。

第二説 ひようは前の如く露兵なり、ろくは六なり、六は總領の甚六、贅六、宿六、など云ひ總てツマラヌ者の名稱なり（おさし合は御容赦）故に露兵を指して兵六と云ふ。

第三説 ひはろくはひよろくの誤まりなりヒヨロ來なり日本兵と違ひ露兵は照準も極まらずガタ／＼慄ひながら撃つゆる彈丸もヒヨロ／＼と來るおかしさ、名ずけてヒヨロク玉と云ふ。

この三彈孰れか中れるやを知らず然るべく取捨し玉へと云爾。

一八〇 滑稽キシャの速力は一時間幾哩走るや、それが分らねば早く白旗を掲げ

て降参しろ

何ッ、生意氣を云ふな、斯う見ゑても生粹の日本人だぞ、骨が舍利になろうとも、オイソレと降参しておたまりこぶしがあるものか、何だ、滑稽汽車の速力は一時間に幾哩走るとつまらねへ事を聞きやアがるうるせへ奴だ、知らざア教へ遺るから、三遍廻つて鹹鏝立をして叩頭をしろ、滑稽汽車はナ一時間に少くも、嘘八百哩は大丈夫だ、露助を滿洲から追拂つた後は露清鐵道でも西比利亞鐵道でも、滑稽汽車と掛替の工事を始め、残らず滑稽汽車の世界にして了うつもりだ、其時は君も石炭運びの人足位には使つて遺るぞ。

一八一 滑稽汽車の通過する各驛起點終點及び時間表如何

滑稽汽車は、ホコトン國マチガツタ驛から、クダラン國オツカシー驛まで鐵道が敷設してあります、其間の各驛は數百ヶ所で、中々茲に記し切れませんから略します、其

内滑稽國大薬井田と云ふ都會が、一番繁華で、景色の好いのは頓狂山、臍の川、此川筋はあつち、こつちへ振れて水が何方へ流れるか分りません、發車の時刻はマチガツタ發一番列車が午後十三時七十八分終列車が午前十七時九十分タツタ五秒間でオツカシーに着きます、一日の發車度数は十萬八千回。

一八二 以心でんしんの仕掛を知るまい

矢張一種の無線電信にて、其仕掛も別に異つた事は無い、陰陽兩電氣の作用に由り、双方の消息を通ずるので、交戦中其仕掛を詳細に説明すれば、軍機の秘密を洩す恐れがあるから、此處暫く無言々々。

一八三 或る種類の女の手管あるものありと聞く、此管は何から製し何に用ゆるや

いれんと云ふ竹にて製す、此竹は首ツ竹と似て非なるものなり、男の鼻毛を手繰りて

巻き付ける時、是非必用の品にて、末は尻毛までも抜いて之に紡ぐ、其外色毛、金毛のあるものは、必ず引寄せ此管にて巻上げる時、奇妙に何の毛もなくなるやうになると云ふ、又手管は矢張煙管の様なものにして、ラウは浮木にて造り、煙を吹くものなり、此の煙に巻かる、時は、如何なる人も目眩みて、自由自在に操らるゝ事、君の經驗せる所なるべしと、管らぬ答辯仍而管んの如し。

一八四 へな猪口と云ふ猪口はどんな形の器か矢張酒飲むものか

へな猪口を御存知ないやうでは成程貴公は大愚先生だ、至つて廣い代りに淺く、底がいびつで坐りが悪くおまけに焼が悪くて、一寸ぶツつかれば直ぐ挫ける仕様のない器さ、勿論酒を飲む器だが、人のなさけなど云ふ酒は飲めない、丁度おツ猪口ちよいといと云ふ猪口と同じで、如何にも猪口くして居る、併し淺草奥山邊で用ゆるのは是非この猪口に限るけな。

一八五 お茶ツピーといふ笛の製法、用法及び其音を問ふ

ヤカマ椎の木の枝に穴を穿ち、手許にツラの厚皮を捲きて作る、女學校にて毎日用ゆる樂器にして、之を用ゆる伶人は、海老茶色の袴を穿つこと多し、薄き唇にて吹けば殊によく鳴る、其音は恰も百舌鳥の鳴聲の如しと云ふ。

一八六 辛棒とは如何なる棒に候や

辛棒は堅木で作り、人間の油汗を附けて磨き上げた棒なり、別に貧棒と云ふ棒あり、是は借金(借金の山と質の流)の間に生じたる物臭木にて作り、厄介千萬なる棒なるが、此辛棒を以て擲き折れば粉微塵形無しとなる支那にては此辛棒を搖錢樹と稱す、即ち金の生る木なり、日本にては此棒を三角(義理をかく、汗をかく、耻をかく)に削り家の寶とする者あり、庭へ挿して置けば自然根を生じて大きくなり、金椗と變すべし、近頃のハイカラ先生は、之を漢語でキンケンと稱す、併し如何なる職業の人にてても、

辛棒は是非共一本宛所持すべきなり。

一八七 ベラ棒とは如何なる棒なるや

ベラは筥なり、其上に軟泥の二字を添へ、軟泥筥棒と云ふて始めて字義を成す、即ち軟かき泥や筥や棒で攪き廻した處が何の効能もなし、箸にも棒にも懸らぬといふも是と同様の意味にて、至極ツマラヌ人間の代名詞に用ふ。

一八八 禿頭を藥罐と云ふ、是にて湯を沸し得ば經濟なれども其方法ありや否や

無論沸し得るなり、差配の大藥罐杯は店子を相手に眞赤となり、湯氣を立つる事珍らしからず、既に湯氣の立つは湯の沸きたる證據なり、他人より焼付らるゝときは更に甚だし、併し臍で茶を沸す場合には、藥罐は一向沸え立ず、尤も手頃の薪を以て藥罐を擲れば、大抵沸え立つものなり、其湯は別に用法なければ沸して却つて不經濟なる故、成るべくは臍茶で濟まし置くべし。

一八九 爪に火を點じて儉約するといふが、此の火を電氣や洋燈の代りに用うれば、更に儉約なるべし其方法なきや

愚かの間を出すものかな、澁柿より製せるシミツ垂れといふ汁を、四腕棒にて掻き交ぜ、赤螺の貝に注ぎ込みて、其れに爪の火を點せば、其明らかなる事、懐中に藏せる鍵袋までも照らすべし。

一九〇 毎日の新聞に白波一束だの女白波だのとある波が一束二束と括らるゝか又一波に男女の別もあるか

貴公も物知らぬ男だな、波に男女がある位か、風にさへ男女があり、名までついて居る、お染風、おかめ風、久松風、爲朝風など云ふのは、貴公も出逢つたことがあるだらう、それで波には男波女波があり、片男波と云つて、男やもめの波さへある、が波は物騒な奴で濱邊に立つて茫然して居ると、不意に足許を攫へて行く、泥棒同様な

奴さ、で困るから卑陋だが露國あたりで、小便の凍つたのを一把二把と括る様に、波の凍るのを待つて括るのが白波一束さ、氷が解けると例の足許を攫へるので、益々之を凍らせやうと云ふので、監獄に送る、イヤ監獄に送り懲らしめると云ふのは間違ひで、アレハ寒國に送つて凍らしめるのよ、だから冷へるほど善いので、どうだヒヤ〜だらう。

一九一 物の入れられぬ倉があるのを知つとるか

何んな難題でもちつとも驚かんのは僕の僕たる處です、何んだと物の入れられぬ倉、これはちと面倒な事になつた、ナニコツチの事で、やつとの事で二つ三つ思ひ出しました、鯨がぬらぐら、吉野にさぐら、御城にやぐら、切れぬ刃物がなまくら、布團にまくら、闇夜がまつぐら、芝居が忠臣ぐら、見えぬがめぐら、帶地にこぐら、何と驚いたらう。

十三 滑稽宗教

一九二 南無阿彌陀佛と、南無妙法蓮華經と、アーメンとは、執れを稱へたるが最も利益ありや

一字千金と云ふ古來の相場によれば、一字の多きも千金の利益多き譯故、南無阿彌陀佛より南無妙法蓮華經の七字のはうが徳用なり、又七字の題目より十字架のアーメンのはうが、三千金の利益多し、此外眞言九字の秘法あれども到底佛教は基督教に及ばず、併し觀音様の定紋は卍、即ち萬字にて、懸直さへなければ、是に上越す者無かるべし。

一九三 馬の耳に念佛と云ふ諺あれども、誰が馬に向つて念佛を唱へたる事ありや

白馬經を駄すと云つて、最初佛經を支那へ運んだのは白馬で、今でも白馬寺と云ふ寺がある、又支遁と云ふ坊さんの乗つた頻伽と云ふ馬が、或る川で水を飲んで小便をしたら、其處へ蓮華が俄かに咲き佛の功德を現はした、其外馬が佛教に歸依した話は一々數へきれない、觀音にも馬頭を名乗るものがあるので大抵分るだらう、だから馬は念佛を能く聞き分けて、信心堅固なものである、それが爲め馬の耳に念佛と云ふ諺が出来たのに人間共は自分の不信心に引較べ、譯の分らぬ譬に引くのは大間違ひ、馬の方では佛々不平を鳴らして居る、『極樂を何處の里と思ひしに、杉葉立てたる又六が門』と云ふのも、つまり白馬があるので、極樂淨土にたとへられてあるのだ、馬が貧道と稱するものも、佛弟子となつた證據だらう。

一九四 なむからたんのうとらやアやアとは如何な譯か
是は昔虎屋と云ふ豪商が、酒の好きな爲に身代を飲み潰し、落魄して乞食坊主となり

自ら懺悔して飲むから足んねへ、虎屋アやと、經文の如く節を付けて唱へ歩きしより始まる。

一九五

無情の風に誘はれて此世を去ると云ふことがある以上は有情の風といふもあるならん此風に誘はるゝときは如何になりゆくべきや。

有るともくお染風臺灣風つむじ風よりも悪い風じや、落花情あれば流水豈心なからんやと云ふ本文の通り、蕾の花も盛りの花も吹き落す風で、和名戀風、漢名淫風と申す、一旦之に誘はるれば落花流水いかになり行く身の上やら、風儀も亂れ風聞も高く、果は風の子と云ふ小供さへ出来る、であるから仲々堅固な折角の校風も此風の爲には忽ち風靡する能く氣をつけさツしやい。

一九六

地獄は死んだ人の行く處だから、娑婆から行く人ばかりで、別に死人もなく、人口増殖で大困りだらうネ

イヤ地獄には死ぬ人のない代り、反對に生きて娑婆へ出て来る人がある、だから昔から南無幽靈頓生菩提と云ふだらう、頓生は即ち娑婆で頓死と同様サ。

一九七

鼻の下喰ふ殿は何處にありや

鼻の下喰ふ殿は梵天國自墮落山貧窮寺の境内にあり、目下貧窮寺の住職は、厄介上人と稱して大黒天女を信仰し、般若波羅密の秘法を修し、喰ふ殿の修繕を名として、多少の觀財集りしも未だ工事に着せず、何れ尻喰ひ觀音を安置するならんと云へり。

一九八

禪學と田樂の比較研究如何

一體禪宗坊主は味噌、漬物類に縁ありて金山寺味噌、納豆、澤庵など何れも禪家にて製し始めたる事は誰でも承知せり、禪學を振り廻して世間から味噌を附けられ、又心機一轉で味噌をつけられた方もある、故に味噌は禪家に是非共必要の品にて、味噌摺坊主の多きも之が爲なり、右にて禪學と田樂と全く相似たるものなる事を解せしな

らん。

一九九 三途の川は何處より流れて何處に注ぐや

三途の川は其水源三條あり、是其名の因つて起る所以、一は血の池に發源し、二は劍の山針の山等の溪流相集りしもの、三は閻魔大王の顔洗ひ井戸より流出せるもの、死出の山の麓に於て三ツ相合し、十萬億土を貫流して無量永劫海に入る近來汽船を浮べて亡者の往來に便し、沿岸の幽民は漁業を以て其日を送り居りしに、市川市兵衛氏來り劍の山にて銅鑛を發見し、開鑿を試みしより、其鑛毒川に入りて魚類全く絶え、目下大騒動なる由。

十四 滑稽故事

二〇〇 桃太郎が征服せし鬼ヶ島の經緯度及び其後の狀況を問ふ

鬼ヶ島は東經百八十八度八分、北緯九十九度九分だから、我々には容易に探検の目的を達せられませんが、風の便りに聞けば桃太郎引揚げ後、追々開化して鬼が至極おとなしく、弱い者いぢめを仕ないそうですから、我儘増長の國はドンく乗込んで懲らしめて遣るが能いと思ひます。

二〇一 平氣の平左衛門、川流れの土左衛門の來歴を問ふ

其昔平家世盛りの頃に平左衛門尉澄康と云ふ侍あり、某莊園を預りて支配せしが、虎の威を借る狐侍、無暗に百姓を壓制し、種々の苦狀起りしも一向構ひ附けぬより、人が何と云つても知らぬ態をする横着物を、平家の平左衛門のやうだと云ふ事が、後世訛りて平氣の平左衛門、次に土左衛門の來歴は、土佐の國が大地震にて蹉跎の岬は、室戸崎との間が半月形に海中に陥没せし時、十幾萬と云ふ住民が悉く溺没せり、其屍體が日を経て九州南海諸國の海濱へ漂着せしを、ソレ又土佐者の死骸だ、ヤレ土佐者

だと騒ぎ立てしより、海川の區別なく溺死者を、士佐者と名づくるに至り、後に土左衛門となりしなり。

二〇二 ヒヨットコの由来を問ふ

是は落語家前坐君の解釋によれば、權の助様と云へるやんごとなき官人が阿三の方を口説き給ひしに、阿三の方は若しひよつと子でも舉げしならば、如何致しませうや、若しひよつと子がくと心配しつゝ、遂に生まれ給ひし其子の容貌尋常ならず、今の世に假面になりて残れるもの即はち是なりと云へども、古來の史傳小説類にも見えざれば信憑じ難し、一説には江戸時代に兩國邊の髮結床に、瓢床と云ひて障子の看板に瓢畫きたるあり、其處の亭主口先突出て片眼盲ひ、頗る醜き形なれば、其顔を畫きて瓢床くと持囃され、後生訛りてヒヨットコとなりしなりと是れ信に近し。

二〇三 ベランメイの起原を問ふ

ベランメイの解として又一説あり、昔江戸の八丁堀に一人の醫者あり、療治は中々巧みなれども、酒は飲む喧嘩は好き、實に厄介なる先生にて、診察を乞ふ者甚だ少なし爲めに門前雀羅を張る有様、衣服は勿論藥箱から藥匙まで賣り飛ばして、匙の代りに竹筥を使ふ始末、併し病氣を能く療すより、筥でも巧へや筥うめへと云ふ評判が立ち、一の流行語となりて後にベランメイ、されば一文無しの空ツけつでも、腕前は確かだぞと威張る時に使ふ語なり、

二〇四 チンブンカンブンの古事來歴はどうじや

支那語にて清國の清は音チンと申して御尋ねのチンは清國、カンは固より韓國、ブンは孰れも忿なり即ちチンブンカンブンを翻譯すれば清忿韓忿にて清韓二國共に露西亞が傍若無人の亂暴を忿り候ことを申し、天に口なし人を以て言はしむと云ふ譯に御座候、イヤ露國の横暴は天人共に憤ほり清韓共に忿り英米共に忿り果は勘忍強き日本も

赫として斯に怒り先度の征伐に立至つた次第、合點か。

二〇五 話しの纏まらぬを小田原評議とは如何

されば其事なり、問答先生も礪と其間に窮し、大家さんの處に伺ひ奉りし處ろ、其れは秀吉の小田原下向の際の事を云ふなりと鹿爪らしく言ふ、余は其んな事ではなかるべし、村の百姓が小田原提灯を道に拾ふた時、それは袋であらう、イヤ烏帽子であらうと、評議纏まらなかつたから、其れから出たのであらうと云ふ、大家さんば其れではないと主張す、余はイヤ其うだと頑張る、トウ／＼二人の評議が纏まらずに歸つてしまつた、これが即ち小田原評議といふのである。

二〇六 小生事去夜友人を尋ね候處、屏風の貼り交に『二、二思我、二、二不思我』

と認めたる扇の地紙有之候らへ共、何と云ふ意味なりや、友人に問ひしも矢張相分らぬ由御教示被下候は、幸甚

是は古き話にて有名なる事實にて候、昔京都東山の邊りに茶店を出し居る一人の少女有之、眉目容姿類稀なる美人にて、風流の心掛も淺からず、最寄の若者など窃かに云ひ寄る者も數多有之候らへ共、一々刎付け候らひしが、或日二人の美少年打連れ、野邊を逍遙しての語るさ、此茶店に憩ひ、少女と浮世話などして立歸りしに、此少女二人ながら思ひ染め、何れなりとも偕老の契をと人知れず戀ひ慕ひ、二少年も時々往來はしながら更に其心を悟らず、つれなく打過せしより小女は逆も我戀の叶はぬものと覺悟を極めて、一夜鴨川へ身を投じ、相果候後に、少女の筆もて二思我、二、二不思我と認め候扇子を見出し候との事に候、さて其意味は二少年にも判じかね候を冷泉某卿が見て、是れは一種の和歌を認めたるなりとて、

一人にて二人を思ふ我なれど

二人に一人我を思はず

と打誦じ候由、古き册子に有之候。

二〇七

松浦佐用姫が石になり、日高川の清姫が蛇になつたといふ事は實ですか
 女が石になつたといふ話は支那朝鮮に澤山ある事で、何でも水邊に人間に似た形の石
 があると、毛唐人が望夫石と名を付け、種々の話を拵へたものぢやテ、それを松浦佐
 用姫の事と綴ぢ合せたまでぢや、佐用姫は大伴佐手彦の妾で、佐手彦が百濟へ使者に
 行く時、領巾と云ふものを振つて、其船を魔ねき、別れを惜む情をあらはしたもので
 やけな、今で云へば帽子か手巾を振ると同じぢや、山上憶良の歌に『とほつ人松浦佐
 用姫夫戀に、ひれふりしよりおへる山の名』と云ふ歌がある、領巾を振つたゞけは事
 實らしいが、石になつたといふ事は、證據となるべき史料がない、それから清姫が蛇
 になつた話も、元享釋書などに出て居るが嘘蛇らう、ただ女の嫉妬は恐ろしいもの蛇
 といふ譬蛇、日高川の船頭が『鬼になつた蛇になつた、鎌で刈切るやうな毛が生へた』

と逃げ出す所は面白いが、あんな事があつてたまるものか、男を慕ふて石になつた
 り、蛇になつたりしては、今に出征軍人の女房や情婦は、何萬人となく、其眞似をし
 て、日本中石と蛇で填まつてしまふ、尤も石や蛇にはならないが、今の娘共は金にな
 つたり、白鬼になつたりするさうぢや、お、恐はやのく。

二〇八

馬鹿といふ熟語は、趙高が鹿を指して馬と云ひ、二世皇帝を馬鹿にした
 るより始まるとの説あれども、本家の支那の書物には却つて見當らぬ文字な
 り、此理由如何

成程左様問はれて見れば御尤千萬、併し日本には馬鹿に就て歴史上立派の故事あるを
 御存じなきや、蘇我の馬子、入鹿の父子朝廷を蔑如して我意に募りし結果、中大兄皇
 子、中臣鎌足の爲めに亡ぼされたるより、後世の人此父子を憎みて、馬子入鹿と一口
 に罵りしが尙約めて馬鹿と云ひ始めしなり。

二〇九

紫式部の傳記は古書にチラホラ散見致し取合せて大略相分り候へ共未だ海老茶式部の傳記を承知致さず御教示下され候は幸甚

海老茶式部の傳記でけすか、それは明治才女傳と申す拙著に詳しく記してありやす
 (まだ出版は致しやせんが) ちよつぱり抄略してお目先へぶら下げやせう『式部は東
 海姫氏國轉婆縣蓮葉郡列返り村に生れ、夙に鼻垂小學校を卒業して、村内第一の物識
 と云はれし元山左兵衛も口先の議論にては逆も叶はぬ利發者、相者あり相して曰く、
 其鼻の獅子に似たるは鼻息荒く滿天下の人をも吹き飛ばす相なり、其目尻の下りしは
 博愛衆に及ぼすの相なり、髪の毛の赤くして縮れたるは西洋人に似てハイカラ式な
 り、兩の頬赤きは國旗を交叉したるが如く帝國萬歳の相なり(寢入りし時は鼻から提
 灯行列が出すやも知れず)唇の薄きは能辯を示し、尻の大なるは衛生上保險付なり、
 學問に出精せば必ず立身疑ひなしと、是に於て式部大に發憤し、學費を父に強請りて

笈を都門に負ひ、二束三文の式部連に入り、目下ラブの眞理を研究中なり、但し袴の
 色海老茶と限りたるは、海老は列返りを表し、茶はお茶ツびいを意味す、用意の周到
 凡て之に類す云々』未來に屬する分は、天機を洩す恐れがありやすから申し上げやせ
 ん、どうか悪しからずに。

二一〇

私の友達熊公が羽織を打ち殺したら、柳原の土手へ化けて出たと云ひま
 すがどうした因縁でせう

羽織君に代つて其述懐を述べやせう、抑も拙者は熊公の先代より其家に仕へて忠勤を
 勤み、年始節句婚禮葬式、何れも拙者が随いて行かなければ主人の顔が立たないと云ふ
 位、先代が死んだ時、拙者も殉死の覺悟でお寺へ行くつもりであつたが、年數は喰つ
 てもまだ役に立つからと引止られ、據ろ無しに二代の奉公、處が年寄を馬鹿にして、
 晴れの場所へは外分が悪いと難癖を付け、花見のお供一度仰せ付けられず、新參者の

七子九郎右衛門ばかり信用されて、拙者は微腐くなつて押籠められ、無念の月日を送つた處、此春どうしてか不意に引張り出され、久しぶりで日の光を見、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、十文字繩に縛められて伊勢屋の倉へ捕虜の身、何の罪やら更に分らず、七月経つて、古着鶴四郎方へ身賣となり、處々流浪の末、葛輪五左衛門の手に懸つて敢なき最後を遂げ、其一念浮ぶにも浮ばれず、斯くの始末だとサ。

二二一 惜金の山の故事來歴を聞きたし

此山は妻蘭國九圓村にあり、高さ幾丈なるかを知らず、人若し此頂上に登る時は忽ち餓死す、畏るべき山なり、且金銀鑛なく満山身代か桐と云ふ脆き樹木蒼々として繁茂す、又掛鳥、雁金等此上に巢を作り、貧々困々と鳴いて止まず、故を以て其名遠近に高し。

二二二 應來根湖の所在及其測量等を詳しく説明ありたし

尻輕國應來郡轉寢村にある小湖にして泥水なり、然れども其深さ幾丈なるやを知らず、獨眼龍の出入する穴あり、昔或人其深さを測量せんとて、多くの家倉金銀衣服等を投ぜし事あれども、未だ其底を知らず、土人呼んで有頂天に通すと云ふ、人若し過つて陥る時は有頂天へ到り、夫より借金の山へ至り、掛鳥、雁がね等の爲に横死するに至る近寄るべからず。

天文の部

一 『天に口なし、人を以て言はしむ』と云ふ事がありますが、シテ見ると、天は
 啞子ですか

イヤ天には口もありません、耳もあります、又足もあります、其證據には少し堅苦しい
 けれども、秦宓論天の故事をお目に懸けませう、秦宓は昔三國の時代、蜀の玄德に仕
 へた人で、吳の國から來た張温と云ふ使者に、天に耳ありやと聞かれ、左様、天は高
 きに處りて卑きに聽く、詩經に、鶴九臯に鳴いて、聲天に聞ゆとあるから耳がありま
 す、耳がなければ聞える筈がありませんと答へた、次に張温が、それでは天に足あり
 やと聞くに、秦宓は隙かさず、あるともく、詩經に天步艱難と云ふ事がある、足が
 なければ何で歩けやうと答へた、既に耳があり足があるくらゐだから、口もない筈が

ありません、七略と云ふ書に田駢は齊人なり、談論を好み、時人號して天口駢と云ふ
 とありますから、間違ひありません。

二 天に目がありますか

天眼通は千里見透しと昔から相場が極つて居りますから、無論目もあります、甲州に
 は天目山と云ふ山があるではありませんか、又悪い事をすれば、天の網に罹ると云ひ
 ませう、シテ見ると網は目の多いものですから、一つや二つではありません、澤山あ
 ります。

三 天挺舞と云ひませうから、天も時々は浮かれて踊り出すと見えますナ

天挺といふのは、後世の訛りで實は天矛舞と云ひます、これは天が踊つたものではあり
 ません、昔神代に、何邪那岐尊が、天の浮橋に立つて、天の瓊矛を以て滄海を搔探つ
 た時、愉快で堪りませんから、觀喜の餘り雲の滴る矛を振つて踊り出した故事です、

浮橋は浮かれ橋、其處を今でも有頂天と申します、後世何か狼狽た事に天挺舞と云ひますのは、大變な間違ひてあります。

四 雨降つて地固まるとはどういふ譯です。

雨降つて地固まるとは、これも間違ひで、實は飴食つて痔固まると云ふので、飴は痔に薬と云ふ事ですから、天文には何も關係がありません。

五 天とう様と、米の飯は何處へ往つてもあると云ひますが、それは昔日本より

外に國がないと思つた時の事で、今日世界的活動を試むる時代に、米の飯とは小さな了簡、天とう様と麵包とか何とか改正の必要はありませんか。

成程面白い處へお氣がお附きなすつた、それでこそ二十世紀的の男でござんす、併し待ち給へ、太陽も地球の兩極へ行けば數ヶ月間見ることの出来ないところがあります、眞に世界的と云ふなら、此諺は全然廢止したほうが好いでせう。

六 霰は雨の凝固つたものでありながら兩冠に散ると云ふ字を書くのは、どうい

ふ譯ですか

雨の散彈と云ふ意味から、あの字を書くのです、少しも不思議はありません。

七 天は一つしか無いと思つたら、三十三天あると、檀那寺の和尚さんが申しま

した、其名を一々教へてください

イヤ是は厄介な事を聞きに來たもんだ、佛教では須彌の半腹に四天あり、東が持國天、西が廣目天、南が增長天、北が多聞天、さて其上が忉利天、忉利天を四方八天づゝに分けて、中央に帝釋天、四八三十二に一足すの三十三で即ち三十三天と云ひますが、一々其名を擧げると云はれては閉口しますナ、ヨシ遣付けませう、大黒天、辨財天、

毘沙門天、歡喜天、ふらん天、ぶらし天、ところ天、かん天、銘酒天、揚弓天、喫茶天、珈琲天、牛乳天、雜貨天、唐物天、洋服天、書籍天、新聞賣捌天、雜誌天、料理

天、藥種天、晴天、曇天、雨天、炎天、まだ足りない、困つてなア、狂人は瘋天、鼻毛を算まれて有頂天、羽織に似た半天、着物の短いのが天ツル天、三味線の音締がチン天、まだ三十天しかない、好し来た、汽車の運天、藝者の不見天、オット忘れた弘法様お加持の灸天、これでどうやら三十三天まで漕ぎ付けた、ア、苦しい。

八 大雨を形容して盆を傾くるが如しと云ふ事あれども、盆に一杯ぐらゐの水を翻して見たところが、到底糠雨ほども濡れない、これはどうした譯です。

成程ナ、併し通常の盆ではない、大梵天と云つて、青天井一面の素的に大きい盆です能く考へて御覽なさい。

九 風は如何なる小さき穴にても見付けて這入れば、目があるに違ひなしと云ふ説と、ナニ大木にブツ附かるところを見れば、盲目なりとの説と兩様あり、これは何れが事實なるや

風にも種々あるから、目のあるのもあるし、盲の風もあります、決して一樣ではありません、先宋玉が雄風と申したのが大王風、又春先徐々吹くのが少女風、お染風やら久松風、盲滅法界に暴れ廻るのが狂人風、針の穴のやうな處を潜つて來るのが泥坊風比頃は灰殻風が大流行で、淫風といふ悪い風も中々勢力があります、畢竟風眼といふ病もあるから、通常風にも目はあるとして置くべしサ。

一〇 風を喰つたといふ事があれば、何れ食物になるものと見えるが、風の味は如何

風を喰へば腹が風船玉のやうになつて、高飛をする、實は至極危険い仕事で其風味と申しては何とも早申し上げやうない、たい冷々するばかりです。

一一 お月様は昔から十三七ツですが、どうして年を取らないのですか
月は毎月變りますから、先のは何處へか隠居するのでせう、能く月番のお方に聞いて

御覽なさい確かな事が月とめられるでせう。

一二年の中に一つあつて、一日の中に二つあるものとは何です
假名の『ち』の字です、いちねんとソレちは一つでせう、いちにちと、ソレちが二つありませう。

一三 新年を新玉と云ふは、年があらたまるといふ意味にや

違ひますく、左傳に春王正月とあるを、書き誤まりて、王を玉となし、新の字を加へたもので、親王殿下を親玉殿下などと、能く新聞にある誤植と同様の失態です、然るにどういふものが、世俗の文旨共、好い氣になつて、お年玉などといふ事を始め、お雑煮の腹を抱えて笑ひ初、

ふツと氣張つたおとし玉かな

なぞと、如何に洒落でも、無作法千萬、それも王を玉と誤つたが元、以來新玉といふ

語は廢すべきものである。

一四 雷公は人間の臍を取ると云ひますが、人間は萬物の靈長だから、一つ此方から逆振を喰はせることは出来ませんか

出来ますとも、其實例があります、搜神記と云ふ書に「扶風の揚道、夏田の中に於て霹靂に過る、揚道と鋤を以て之を撃ち、其左の脇を折り遂に地に落ちて去ることを得ず、色丹の如く、目は鏡の如し、毛角長さ三尺狀獼猴に似たり」と載せてあります、又國史補の『雷州には春夏雷多し、秋日には雷地中に伏し隠れ、其形屍の如し、人取りて之を食ふ』とありますから、此調子で雷公を捕へ蒲焼などにしたらどんなもんでせう、併し腹の中で夕立が始まつては堪りませんナ。

一五 風に異一、雪に膝六など、それく名がありますが雷公の名は何と云ひますナ

雷公の名は五郎五郎と極つて居ます、相撲になつてから雷電と云ひます、雷電五郎五郎と云へば諸國に鳴響いたもので、雷名世に轟くと云ふ語はこれから始まつたので、其弟子が稻妻光右衛門、夕立濡助、鳴神音五郎、土用の入、イヤ土俵入は中々賑かですヨ。

地理之部

一六 三千世界と云へば、世界は此世界ばかりでなく、外にもいくらかもあると見えませんが、餘所の世界はどんなものです

此世界の外にも、月世界、星の世界がありますが、どうせ碌なものではありません、抑も三千世界とは嘘で、實は三錢世界といふのです、電車が段々開けて、何處までも○錢均一で、世界の旅行が出来るやうになる將來の理想をお釋迦様が仰やつてから、流

行た語です、ナニ通行税、そんなものは廢してしまひます、實にあれはやくかいです。

一七 安房と阿波、粟の國は二つもある辯に米其他の國なきは如何

米は五穀の大王だから、無論國の名になつて居ます、ソラ米國といふ大きな奴がありませう、ナニ外國米では不可ない、不景氣だからそれで我慢おしなさい、それから豆州が豆の國、備前、備中、備後、美作が昔は喜備即ち黍の國です、さて麥には困つたなア、信州の蕎麥位で負けて置いてくれ、ナニ麥こじつけだと、さう論ばくされては困る。

一八 信州の姨捨山は實際老たる女を棄てし故事ありや

如何に野蠻未開の世でも、さう人間をボカク棄てる筈はない、是は世の中の事を憤慨した一婦人が、首陽山の伯夷を氣取つて、彼の山へ登り、餓死してしまつたから、

斯う云ふ名を付けたのです、人が棄てた譯ではなく、自ら棄てたので、華嚴の瀧へ飛込んだ男と同じやうなものサ、そこで女の伯夷だから姨の字を用ゐたのです。

一九 東京の地名に一々意味ある詞を冠むらせて見せ給へ、例へばまゝに品川、

何だ神田、智慧は淺草といふあんばいに少しむづかしからう

なんのく、お茶の子さいく、朝飯前だ、それ驚くナ、

情は深川、心から小石川、何か下谷で、眞面目で本郷、顔は赤坂、お酒を飲んでも

違はぬ本所、仲は吉原、噂は高輪、末はそれ三田、女房は牛込、角は日本橋、

高利の日比谷で、貧々駒込、吐く息青山、そうく身代も内藤新宿。

切がないから、此くらゐにして置かう、筆序に安政二年江戸の大地震の時の名所案内を反故紙の中から探し出してお目に懸けませう。

火事の出た刻限がおほかた夜の 四つ谷

早桶のかはりにいれる

怪我人のからだはみな

野じゆくのひとはみな

がらくくと屋根より落る

此地震ではみな目が

家々はみな

所々の家は毀れて湯屋の

とむらひの多いのでみんな喜ぶ

人のはなしはみんな

金もちのかほはみんな

名倉へ行く人は皆戸板へ

田原町

あざ布

外神田

土器町

丸の内

七曲り

まき町

寺まち

鐵砲洲

青やま

乗物町

世間の人はみんな

火事はあつちこつちへ

職人の手間はみんな

さくはんの來るを

みな人々は梁の

大火事にて直の上るものは

あぶない所はみな

みなく野宿を大方

怖い目に實に

所々へお小屋は

焼死んだ人の色は

根津

富澤町

揚屋町

松田町

下谷

材木町

藏前

駿河町

相生町

橘町

黒井町

地震の話もだんくもう

尾張町

さて今日となつては、太平極樂、文明開化の花の都で、こんな事は夢にもありません

ん。

・二〇 伯耆を伯州と云ひますが、成程箒だから掃くしうは宜うございませぬ、他

にも此類がありますか、肥前のかく州、越中のきん州など出鱈目はお断り申

します

もう喰ひ安藝だから噎氣がはい州はどんなものです、次に武藏(穢し)でお尻からブー

州、イヤこれは尾籠千萬、失敬々々。

二一 利根川の坂東太郎、筑後川の筑紫二郎、吉野川の四國三郎など、川にはか

りこんな名があつて、山になきは何故ぞ

俳優でもおやまと云へば女形だから山にはそんないかつい名は付けません、駿河のお

ふじさん信州のおあささんなどで分りませう。

二二 戀の淵は何川にあるや、且其深さを問ふ

「筑波嶺の峯より落るみな川の川こひぞつもりて淵となりぬる」と陽成院の御詠もあるから、筑波山の下即ち常陸のみな川の川だと云ふ人もありますが、實は何處でも川のあつる處にはあります、併し儘の川、嘘の川などにあるのは當になりません、深さは容易に分りませんが、底抜だと云ふ評判、おつこちたら大變、到底助かりませんから、成丈近寄らないが上分別だが此淵は直に淺瀬と變り易いやうです、新橋や柳橋又は赤坂の溜池邊にもあるさうですが、アレハ泥水で、首つたけ陥つたら大變な事になります、御用心々々々。

二三 お茶の水は其昔、將軍様のお茶を立る水を汲んだところだと云ひますが事實でせうか

イヤあんな穢い水を、何で將軍様がお使ひなさるものか、蛭が飛出してても、まだ水道のほうが清潔です、あれは其の海老茶式部のお茶ツビーを製造する所が、傍にありま

二四 和蘭國の事は地理書にも見えますが、ハラランダ國の事は一切書いてありませ

せんナ、これを一つ伺ひたいもので

ハラランダ國の事位が分らないでは、此文明の世の中に生きては居られませんぞ、ハラ

ンダは元來カ、アが原を開拓した所で、岩田川と云つて、帶のやうな細い川で取り捲

れ、鹽釜明神を非常に信仰するところです、コロンダ國とは實に大敵で、一たび之に出

出遇へば、質屋と同じ事、六月七月が流れてしまいます、安山平山と云ふ山もありま

して、これは至極無事ですが、難山と云ふ奴が能く人を惱ます危険山で、事によると

暗から暗へ落ちます、孰ちにしても末は破裂しなければならぬ厄介の國です。

二五 滅法海といふ海の所在を問ふ

彌八と云ふ人が始めて探險して、滅法彌八と云ふ名を取りました、其彌八の話に依ると旨が沖の向ふで暗雲といふ雲が始終波と續いて、一寸先も見えないさうです、海中には無鐵砲と稱する河豚、向ふ見ずといふ蛙などが遊いで居ると云ひます、

二六 見かけた山は何處にあります

見かけた山の杜鵑、杜鵑の名所ですナ、左様、これは其の越中の國にありませう、どうも山は見かけても、向ふから外れ勝ですからナ。

二七 妙竹林の所在地由來をお尋ね申します

畏まりました妙竹林は支那の怒論縣醉狂里にあつて、昔晋の時代に七人の妙な奴が集り、酒ばかり飲んで居たところ、この竹は如何にもひねくれた素性悪く、眞直に伸びません、土地の加減で變つた風の吹く故でせう、七人の連中もつまりそれに

ブれて、妙な事はかり喋舌つて竹林の七賢なぞと云ひますが、根性も曲つて竹籤ばかり睨んだ癖が失せないから、唐人も白眼看他世上人と云ふ詩を作りました、藪睨みと云ふはこれが始まりです。

二八 喜見城は何處にあるや

喜見城は矢張極樂國の中にあります、周圍に笹が一杯に生へて居るので、笹の喜見、一杯喜見などいふのは之がためです、中に歌舞の菩薩が觀請してあつて、花の雨がふりかゝる、其心地の好いこと堪つたものではありません、不破、名古屋の茶番などもあつて、春は櫻、盆は燈籠、賑かな事夥しい、併し折々尻尾のない古狐や古狸が人の懷中を覗つて尻毛まで抜く事がありますから、若い者などは夢にも行くところではありませぬ。

二九 地獄の一丁目と云ふ處は、餘程名高い土地のやうですが、見て來た人があ

りますか

イヤありますとも、芝居へ往つて御覽なさい、毎日二人や三人は舞臺から直に地獄落し、樂屋へ往つて見ると、既う歸つて来て、ピン／＼跳ねて居ます、アレに聞いて御覽なさい、能く容子が知れるでせう。

三〇 藪坂と云ふはどんな坂です

は、ア鍛右衛門の住んで居る處ですヨ、アタジケ梨と云ふ梨の木があつて險しい坂で轉んだらタゞば起きられませんが、石塊でも何でも握まなければ駄目です、時々生爪を剥す事もあります、眞暗でしてナ、爪の先の燈で透して通るのです。

人事之部

三一 日本もズツの昔は神代と云つて、神様ばかりであつたのが降つて人間の

世となつたと承はつて居ます、神は人より勝れて居るものだから世の中は必竟退化した譯に當るやうですが如何です

此世界に退化と云ふ事はありません、時々刻々に進化するばかりです、神代と云ふのは、ツマリ人間がまだ人間に進化しない前の事で、ダウキンの所謂猿の時代でせう。猿は十二支で申の字を書いて、申であると言ふ事を示した文字が神でせう、今日では全く進化に後れた紳士といふ連中は猿に糸を附けて舞ひ歩かせられるので之を猿智慧男と申します。

三二 笑ふ門には福來ると云ふが、誰が福の來るのを見ました、

是は同氣相求むると云ふ、古語を云へ換へたもので、此方が始終ニコニコ笑つて居れば、お多福即ち天錮女命、略してお福さんと云ふ女が、オホ、ハ、ハ、と笑ひながら這入つて來ます、お福さんも此頃は海老茶袴で浮れ出し、往來でも何でも目尻を下

けて、笑ひ顔をして居る男と直様お知己になるさうだ、君も時々試して見給へ。

三三 美味いと云ふ事をおいしいと云ふは何故ぞ

是は其昔或人が、美味いを馬いと見立て、之に對しても一ツとお牛いと洒落たのが段々轉訛しておいしいとなつたのです。

三四 醜婦の事をスベタとは是れ如何に

それは其の昔或る女が泥濘で這つて轉んで、大きな石へ顔を打付け鼻柱が缺けて、額と頬が腫れたので三平二満になつた處から、チヨツビリ鼻の頬と額と張り出した女を見ると、彼婦も這つて怪我をしたのかと云ふ事が流行り、其後何でも三平二満さへ見れば、這つたくアレも這つた女だといふのでスベタ。

三五 或る人が私の事を脳味噌が足りないと申しますから、何處かで脳味噌を買

ひたいと思ひますが、市中何れの味噌屋でもお生憎様と云つて賣つて呉れま

せん記者様其賣捌所を御存じなら教へて下さい

脳味噌と云つて別に賣る處はありませんナ、あれは各々母の胎内から貰つて來るので、今更欲しいと云つても仕方がありませんが、全體薄ノロ君の脳味噌も足りないではなく、鹽が甘過ぎて腐敗したのでせう、どうも脳味噌が腐ると不可んもので、僕の友人の拔作、三太郎、與太公なども聊か腐敗の氣味であつたが、僕が勧めて芥子と山葵を澤山喰せたら、段々癒つて來るやうです、最も是は目から鼻イヤ鼻から目へ抜けるので、効能があります、時々生半可の氣いた風をするのに困ります。

三六 頓狂とは何の事だ

頓狂の頓は頓死の頓と同じで、俄かに氣狂ひじみた事を云ふので、今まで眞面目だと思ふと、びよこり下らない理窟にも合はない事を云ひ出して、人の意表外に出るソコで他人が彼の男は頓に氣狂でもしたかと思ふ是が即ち頓狂と云ふもの。

三七 仕事に怠けるを油を賣るといふは何故で

是は其昔美濃の國稻葉山の城主齋藤道三がまた油賣の平九郎と云つた頃、二階の上から錢の穴へ通して地上の油壺に油を注ぎ入れ、お客を引付けた處から、ソレ油賣りの平九郎が來たと云へば、之を見るために、近所近邊の人々が自分の仕事を棄置いて見物に出掛ける、そこで主人や親方が、何だ手前達まで油を賣るのか、そんな者を見て居らずに早く仕事をしろと云つたのが、一の故事となつて仕事を怠け、下らないものを見て居るのを、油を賣るといふやうになつたのです。

三八

私共の下女は大道曰宜しくといふ大きなお尻ですが、昨日井戸端會議の議長さんが、尻が軽くつて困ると斷案を下しました大きい癖に軽いとはどふいふ譯でせう

それは品によりて大きくも軽く小さくも重いものがあります、豊臣太閤などは丈が三

尺五寸、加藤清正は七尺五寸、それでも孰らに貫目があると云へば、無論太閤のはうが貫目があります、君の處の下女のお尻も、大きいばかりで、中には浮氣といふ瓦斯體が籠り、それで膨脹して居るから軽いのです、之を一名風船尻と云ひます、併し下女の尻は餘り重くつて、容易に動かないのも困る、何でも物は一利一害だから、我慢すべしサ。

三九

間男と云ふ事は聞きましたが、まだ間女といふ事を聞きませんが間男があれば間女もある譯でせう。

ありますヨ、元來あれは魔男と書くのでツマリ魔物ですからネ、そこで女は魔性の者としてありませう、阿魔と云ふのが、魔男と同じ理窟です。

四〇

泥匠の女房亭主の顔へ泥を塗ると云ひますが、各商業によりて同様女房づくしの洒落を、二ツ三ツ聞かせて下さい

おツと呑込み承知の助、早速左の通り、面白うござすよ。

薪屋の女房堅木だく

炭屋の女房怒ッて眞赤になる

雞屋の女房亭主の咽を縊め

鍛冶屋の女房何事もトンチンカン

玩具屋の女房何日もピーク風車

煙草屋の女房人を烟に捲き

馬車屋の女房跳つ返り者

おでん屋の女房味噌を附けられた

豆腐屋の女房まめで働く

四一 盗賊といふ文字はどういふ理窟で組立てたものか、敢て博識の滑稽問答記

者に問ふ

盗は慾の深いことを形容した文字なり、其理由は皿の魚を奇麗に喰つて了つて、其次は皿までも喰はうといふ心で、次は皿と書き、盗と讀むなり、又賊は貝に従ひ我に従ふ、昔金銭の無い時代貝殻を以て富を交換した、そこで財寶等の文字皆貝に従ひ、我即ち西方の野蠻人露助のやうな奴は他人の所有でも何れでも手當り次第に取りたがるから、賊といふ字は出来た譯、何と是で明瞭にお分りだけせう。

四二 眞赤な嘘とは如何

嘘に赤い青いのと色別はありますが、是は汽車の切符から始まつたので、或る横着な奴が、三等の赤切符を持つて圖迂々々しくも一等列車へ乗込んで胡魔化さうと思つた處、イザ切符の検査となつて、オイ貴様は赤切符ぢやアないか太い男だと、驛員に發見されて處分されたから嘘や實物の代用語になつたのです、それが二等の切符な

ら、まだ青いので、罪も軽いさうです。

四三 通行税を徴収するに及んでは、紳士連が年頭歳暮に於ける近縣旅行一名室内旅行も課税すべきものに候哉。追々歳暮に切迫し來れば、念の爲御伺ひ申候、何分の御指令仰ぎ度候也。

法律は裏面の事情如何に拘はらず、表面現はれたる事實に依り執行し、少しも假借するものにはあらざれば、無論課税する事と心得べし、珠に待合に閉籠り珍鴨旅行など企つる者は、目玉の飛び出す程多額の税金を徴収すべきなり。

四四 鼻の下の長い者は、目尻が下つて居ると居ひますが雙方の間に何か關係ありや

無論關係がありませんとも、自惚鏡といふ鏡に向つてそろりと鼻の下を長く引延して御覽なさい、頬の處の筋肉が下へ引伸され、其影響で自然目尻が下ります。

四五 コンマ以下の人間と云ふ事は聞いたがサンマ以下とは驚いたと、此間或る處で話して居る人がありました、サンマ以下の人間とはどんな者でせうか、一つ例を擧げて教へて頂戴

左様、サンマ以下から鱈髯の生えた丁斑魚のやうな者でせう、高師直が判官を指して鮒だく、鮒侍と罵つたのも、矢張サンマ以下といふ謎、一名トンマと云ひます。

四六 色が白けりや七難隠すと云ふ事あり、七難とは何ですか
此難は火難、盜難、劍難などの難と違つて、人の所謂難癖の難です、先づ第一がニキビ、第二がソバカス、第三が痘痕、第四が痣、第五が黒子、第六が火傷の痕、第七が腫物の痕、之を色の白いので、胡麻化す事が出來ると云ふ事です。

四七 鼻垂しの巡送りとは何の事です

兄が九つか十になつて、鼻汁を垂らさないやうになると、弟が鼻汁を垂らして居る、

弟が生長すれば、其の又弟が鼻汁を垂す、段々巡送りになるからです。

四八 女房は家庭の花形なり、故に嫉と書きて、かゝと讀むべきに何時の時代やら書き誤まりて嫉となれり、花と鼻と訓讀の誤りより來ると思はるゝが如何のものにや

自分の女房を花に見立てるとは餘程鼻の下の延びた間拔なり、元來亭主たる者が女房の自慢をする位、見つともないものはない、たとへ美人にせよ働き者にせよ自ら卑下すべきものだ、故に自卑の二字を合せて鼻と讀む天狗は廢せと云ふのである、そこで女房に鼻の字を書いて嫉と讀む、花の字を書くは宜しくない。

四九 秋茄子を嫁に喰すなと云ふ事がありますが、姑はどうして斯う意地の悪いものでせう

これはく大變な間違ひ、茄子は子宮に大毒、且つ妊娠前には甚だ宜しくない、取分け、秋茄子が毒になるので、之を嫁に喰せては、身體に障らう、孫が出来まいと、姑の慈愛心から喰せないので嫁を憎むどころが、嫁を大切に思ふからです、それを嫁が僻み根性から、こんな事を云ひ始めたのです。

五〇 似たもの夫婦とはどういふ事です
普通は同氣相求め、同病相憐むと云ふ事に解しますが、氣の強い者同志で夫婦になれば、毎日喧嘩ばかりで困るし、又肺病患者と肺病患者が夫婦になれば困りませう、だからこれは似た者夫婦ではない、煮た者夫婦でお互に焼いては不可ない、夫婦は煮凝りになれと云ふ事です、どうです、分りましたか。

五一 茶人文盲とは何の理由ぞ

是に就ては面白い話がある、或る處で茶の會があつた時、床の間に一休禪師の筆の活人劍、殺人劍と云ふ六字の軸物が掛けてあつたので、茶の宗匠が孰々と見て、どうも

六字は縁起が悪い南無阿陀彌佛の六字の名號と間違ひさうて不可んから、上の一字を切り取つたら好からうと云ふ發議、満座何れもお歴々の貴人高官、成程それが好からうと、早速之を切取つて、人劍殺人劍の五字にしたこれで漸く恰好も好し字數も好い宗匠は宗匠だけ、感心なものだと、何れも褒めちぎつた、一體人劍殺人劍とは何の事やら意味が分らぬ、茶人は大抵こんなのが多いから、そこで茶人文盲といふ諺が出来たのである。

五二 女房の尻に敷かる、亭主の面はどんなものです

平身低頭の結果、習ひ性となるばかりか、面から身體まで扁平くなつて、木葉鏝の如くで目鼻はホンの模様をやうなもの、それもそうでせう、大道白のやうな尻の下へ始終敷かれるから、それに毛が一面に生へて居るので熊の皮と間違へますが、實は鼻毛ださうで。

五三 疊の上の水練といふ事は聞けども、未だ見た事はなし、實際疊の上にて水

練が行はる、ものにや

家内にも風波の起ることあれば、疊の上にて、水練の出来ぬ事はあるまい、官海游泳術も、大抵、疊の上か椅子の上にて爲るのである、又下女などは勝手の板の間で船を漕ぐではないか。

五四 七轉び八起といふ事あれども、七たび轉べは、七たび起る道理ではありま

せんか、昔の人は嘘は云はないと威張つても、そればかりは間違つて居るでせう

間違ひはありません、最初轉ぶ前に起き居たのを勘定に入れなから、そんな分らない事を云ふのです。

五五 來年の事を云へば鬼が笑ふさうですが、明後年の事を云へば何が笑ひます

知れた事、天狗が笑ひますさらひ年だから。

五六 娘一人に婚八人、其の娘の名と婚の名を教へて下さい

娘はお金さん縹緞は左程でもないが、金満家だから、婚の候補者が多いので、たとへ小野小町のやうな美人でも金氣に離れたら、不可ませんネ、婚の名ですか、慾野深造爪野長助、握拳源吾、金子保四郎、灰殻喜左、自稱好男、鼻下間延、空手冷懐、何れも落選の面揃ひでした。

五七 幕府時代に、一番の高頭は百二十萬石の加州侯、其反對の小祿は五兩二人

扶持の寺岡平右衛門だろうと思ふが如何ですか

どうしてまだ其下があります、阿波の鳴門の十郎兵衛、これはたつた一合の知行と云ふ事、内儀のお弓の話で分ります、其下はあるまい。

五八 口から年貢は出ないと云いますが實際ですか

口から年貢は澤山出ます、人口割の附加税と云ふがある、はありませぬか。

五九 姑は女の古いのだから女扁に古といふ字は至極適當だと思ひますが、白の

男と書いてしうと、は少しも道理に當りませんナ、男なら矢張白より杵でせ

う

とんだ事く、舅の白は白ではありません、舊の略字で、矢張舊い男と云ふ意味ですよ。

六〇 襤褸買と云へば、至極貧民の商法と思ひしに、立派な旦那様にて斯る事に手を出す者あり、其損益如何

これは算盤珠どころか、箸にも棒にも懸らぬ商法なり、而も其ボロを隠さうとして、ますくボロを出し、旦那の沽券まで二東三文となりて、人に踏み倒され、元も子も耗つて、身の破滅となるが落なり。

六一 年を拾ふといふ事あれども、如何にして拾ふべきや、實際拾へるものなれば、

我も一時に二三百歳拾つて武内宿禰の向ふを張つて見たきものなり

昔或るところに二人の老婆出て遇ひ、甲の老婆、乙に向つて、お前様いくつになりやしたと聞くに、私かへ、私は今年七十サ、と答へた、甲は之を聞いて、さうかネ、私は今年六十九で、お前様より一つ少ねへが、來年は丁度お前様と同じ年になれやすと此老婆は年は自分一人が取れるものと思つて居る、問者も矢張此類と見えますナ。

六二、厄介長者の住所を問ふ

厄介長者は梵天國持餘郡業晒しの里に住み、本名は元唐五足齋と申します。

六三 目から鼻へ抜ける人とは如何なる人ぞ

山葵の曲藝を行る人ですナ、併し目から鼻へ抜ける位の間人は澤山あります、僕などは耳から尻へ抜けて困ります。

六四

過般裁判所へ参りましたら、刑事の被告で、強盗犯でもありましたらう、

蚊の脛のやうに瘠せた男が、裁判官に、貴様は大分太い奴だと叱られて居ま

したが、私が見てはどうしても太くは見えません、あの裁判官は目がどうかして居るのではありませんか

裁判官の曇りのない眼鏡で見たなら、決して間違ひはありません、肉眼は到底アテにならんもので、太く見えても細い奴があり、細く見えても太い奴があります、腰が低いと云つても丈の六尺もあつて、袴の腰板が我々の額にぶつつかる人もあり、鼻が高くつて困ると云ふから見れば、團子を踏潰したやうな人もあり、大口を利くと云つても可愛いらしい小さな口で話して居る人もあるし、家のおさんなどは、尻の重さばかり十五六貫目ありませんが、近所の人が尻が軽くつて困ると云ひます。

六五 頓珍官とは如何なる職務のお役人なるや

滑稽國政府の事務官にして、重に馬政と鹿政を掌とる、臍の轉籍なども、此お役人に届
 け出づる規定なり、年俸は四萬圓、但し四の字はロハの二字を合せたるなり。

六六 甘井養閑老、籩井竹庵老などの近況を御存じなきや

甘井も籩井も、漢方醫が追々勢力がなくなるので、大に閉口して居ませう、甘井は喧
 嘩さへあれば、七を擔ぎ出して、己れなぞはこれで何百人残したか知れねへと、自慢
 を云ふほどあつて、どんな亂暴人でもあの七を見ると身震ひをして逃げ出しますよ、
 籩井も竹の子が梅雨のために腐りか、つたので、非常に忙しいと云ふ事です、竹の子
 も梅雨には能く腐ります、矢張梅毒と云ふのでせうナ。

六七 風來人の由來を問ふ

風來は風の加減で吹き廻されて來る人間ですよ、男のはうは不可ませんが、女ですと
 十人が目を付けます、僧正遍正さへ「天津風雲のかよひぢ吹きとぢよ、乙女の姿し

ばしとゞめん」といふ歌をよみましたらう、天津風に吹かれて雲の上にふわ／＼して
 居る乙女なら矢張風來雲來と云ふもので、一名天竺浪人とも云ひます。

六八 女は三界に家なしと云へば、一生宿なしですネ、併し御家内だの、お家さ
 んと云ふところを見れば、家なしどころか、自身が即ち家のやうでもあるし
 これは孰れが正しい説でせう。

三階に家なしといふ事で、三界ではありません、女と云ふものはさう無暗に高いところ
 へ上つたり下りたりするのは、衛生上宜しくないので、三階には家なしと思つて、
 上り下りをするなど云ふ戒めです、高山に女禁制の札を建るのも矢張高いところへ上
 下する事を防ぐ手段です。

六九 従兄弟姉妹同志の結婚は鳩の味ありと云へり、されば叔母甥及び叔父姪の
 結婚は何の味ありや

イトコ、ハトコの洒落より出でたる俗諺なり、此例によれば叔姪の結婚は雞の味でもするならん、何となれば甥達コッコ

七〇 江戸の敵を長崎で討つとは、如何なる理由ぞ

趙の蘭相如が才辯を以て權勢を得た時に、廉頗といふ大將が、之を憎み、彼口舌を以て我上に居るとは不都合なり、見付次第に叩き殺して遣らうと思つて居たところが、相如はそれを聞いて、廉頗の姿を見れば、一目散に逃げてしまふ、或人が相如の意氣地なしを嘲り笑ふに、相如曰く、私の才辯、彼の武勇、此二つの中一を欠けば趙國危し、故に我は私怨を忘れて、彼を避くるなりと、廉頗之を聞いて大に恥ぢ、相如の許へ至り、我思慮の足らざるを謝して共に誓ひを立て、敵國を防いだと云ふ故事がある、諸之に就て幕府時代の武士の意氣組に比較すれば、江戸の喧嘩は双方日本人であるから、孰ちが負けても、日本のためにならない、依つて私怨を忘れて、其代り長崎へ往

つて、外國人を相手に戦ひ、日本の國威を示してやらうと云ふ事である、幕府當時に外國人の居たのは長崎ばかりであるから、此諺が出来たのである。

七一 百姓なら百姓だけで宜かるべきに、土百姓と土の字を附けるは何故ぞ
百姓は土をほじくるからといふのも古過ぎる話、これは其の土が百姓になつた事を土百姓と云ふのである、土といふ字は上の一の字を長く、土といふ字は下の一の字が長い、ソコテ土が一つ引つくりかへつて土となる譯、能くお分りでせう。

七二 利いた風の人と利かぬ氣の人とは孰ちが宜しきや

風だけなら利かないほうが好いが、氣となつては困りますナ、氣が利かぬと云へばぼんやり、利かぬ氣と云へば負け嫌いの剛情者、イヤどうも氣は知れぬものとして置かう。

七三 丁稚は長松と名が極つて居ますが、番頭に出世しても矢張長松ですか

番頭になれば忠兵衛とか何とかならず、何れも其位置によりて名は極つたもので、一人者の與太郎も女房を持つては與太郎ではありません、大工の熊や八も總理大臣になれば何の某、お三どんも臺所を退いて、一家の主婦となればおかみさん、馬鹿の三太郎も大學校を卒業して博士にでもなれば、三太郎ではありません、其外權助、三助も其通りです。

七四 鬼の首を取つた人の面はどんなでせう
五月幟の鐘馗様のやうだと思召せ。

七五 胸に釘を打たれたといふ人が、ピン／＼達者で話をして居ましたが、不思議ではありませんか

イヤ別段不思議でもありませんよ、僕の見たのは、膽を抜かれた人、腹のない人、臍を繰り抜かれた人、身體を粉にして働く人、生命を無いものにして喧嘩をした人、何

れもピン／＼跳ねて居ました。

七六 二階で尻をあぶる人と云へば、笑ひものになります、二階座敷の真中で行火でも置けば不思議はありますまい

二階でと云ふから理窟に合ひません、あれは二階からと云ふのです。

七七 愚痴をこぼすといふ事がありますが、愚痴といふものは米か水のやうにこぼすことが出来ますか

愚痴はこぼしても、相手が聞流すと云ひますから、まア水のやうなものでせう、最も甘い奴が多くこぼすものですから、味醂に似て居ますか、愚痴の一名未練と云つて、味醂に似通つて居ますが、餘り下さらないものです。

七八 落膽々と云ふ人が澤山ありますが、まだ一人も膽を拾つた人がないやうですが、落した膽の行方をどうしたものです

落す位の膽は極小さいから有つても見附からないので、せめて烟管玉位あれば、拾ひ集めて、根掛なども宜う御座いませう。

七九 火事でもないに、人を煙に捲くとはどうするのです
 氣焔萬丈の火の手で煽り付けるのです、何の造作もない。

八〇 酸いた男と云へば、夏向は鼻持のならぬ筈であるのに、人がチャホヤするのはいふ理由です

どうも此すいたらしいなど、云ふ男は、危険ですから、油断がなりません、若い娘などがチャホヤすると直に臭い中となり、悪い蟲となります、御用心々々々。

神佛之部

八一 神には神酒を供へ、佛には團子、牡丹餅の類を供ふること、古來よりの常

例なり、されば神は一般上戸にして、佛は下戸なるや

神は元來下戸にして、神酒はホンの印に供ふるのみ、其證據には、お供への餅は、成るべく大きいのを好みて、時には二斗三斗若くは五斗位のを供ふることあれども、神酒と云へば、大抵鼠の小便位を小さな神酒徳利に入れて間に合せ、全く形式に過ぎざるなり、神の名も第一が飴の最中主神と呼ぶをもて知るべし、佛のはうこそ酒を飲めば五百生、手ぼうに生る、など、稱して、人前は繕ひども、内所にては、般若湯と名を附け、コツソリ聞し召すなり、四月八日に甘茶でカツボレを踊り出すところを見てもシラフにあらざるを知るべし。

八二 貧乏神の縁起を問ふ

抑も此神の來歴を尋ぬるに、貧乏しなの、國錢無の里雁山に跡を垂れ給ふ借錢澤山大権現なり、焼野八八どうか成行の守本尊にして其神體は瘦せ衰へて骨と皮ばかり、眼

は凹んで山の手の井戸の如く、海松に似たる襪褌に包まれ、破れたる遊團扇を携へて冷飯草履を穿きたり、而して八八成行が之を守本尊としたる初めを尋ぬるに、貧窮合戦記に見ゆるが如く剛愎山の城主諸色價之助高賣が、米の冠者揚高をかたらひ、裏店が先に攻寄せたる際、大將びんぼう信濃守が下知によりて、八八先陣を承はり、此神の加護を得て、拔群の功を立てたれば、其以來信心ますます肝に銘じたる由、さて當時合戦の次第は左の如し。

成行其日の出立には、すてくさりの小具足に身を固め、やぶれかぶれの陣羽織を着し、つんつるてんの下馬に打乗り、やけすりこぎと名付けたるのつべら棒を小脇に掻い込み、焼糞起して乗り出す、二番手の大將には、朝飯喰はずの將監はらへり業を晒しの陣羽織、ひよる月毛の駒にのら鞍置いて打跨り、がつくして乗出す、三番手には焼石に水色もんないの旗を押立て、一文なしの守種耗びい〜風車の指物

を翻へし、總大將貧乏信濃守は、火の玉緘の大鎧に、貧すりや鈍子の陣羽織、ひいけの駒に、貧ふくりんの鞍を置き、ひん〜として、ひら一文字にひしめき出る有様勇し、附従ふ面々は、かせけとたら助、元手が内膳なんと正兵衛等なり。と是れ當時の正確なる記録によりたるものなるが、其大合戦たる有様を想像すべし、先陣焼野八八深入りして、敵の高利日歩六、爪長の手に打死せんとしたるを、此神が出現まし〜、遊團扇をもて散々に煽ぎ立て、日歩六を追ひ退けたり、其夜爪長残念に思ひ、爪の火を點して焼打を掛けたれども、又々此神の遊團扇にて煽ぎ消したり、其靈驗の赫灼なること想ひ知るべし、之を信仰する者は必ず一生喰はず貧樂に世を終るべし、別當は貧窮寺の厄介上人、氏は下谷萬年町、芝の新網、四谷の鮫が橋などに最も多し、縁日は月の十四日、三十日、盆と暮が一年兩度の大祭、でんでこ舞の奉納あり。

八三 七福神は例も同一服装にて着た切り雀なれば、着替を持たぬと見ゆるが、
それで福神とは如何に

澤山衣服があつてもそれを取り替へ引替へ出して着て、世間に見せびらかさうといふ了簡では金は残らぬ、成るべくは裸で居て、有る着物も着ないが好い、併し此頃には七福神も開化して、例の寶船を汽船にした位だから、夷子、大黒も背廣の洋服で銀行に出て居るし、昆沙門は軍人の正服、辨天も海老茶袴を穿いて池の端を散歩して居る處を時々見掛ける、これも時世時節で段々變つて来るよ。

八四 まとはお經を讀むとき、ブツ／＼云ふ處から名けしや

イヤ佛と云ふ字は、人扁に弗なれば無暗に世の中の金を慾しがると云ふ意を示したるなり、此頃の僧侶が、何とか名を付けて、檀家から金を取る工夫にのみ屈托するを見て知るべし、爺婆の臍線は大抵寺の坊主と放蕩息子に使はれてしまふなり。

八五 不動尊は背中に火を負ひながら、如何にして熱さを感じせざるや

熱けりやこそ、あの如く黒焦になられしなり、不動と云へば動かすと書き、動かぬ者既に死亡せるなり、それを生きて居る如く、見せ掛け、世間を胡魔化すために護摩を焚くなり。

八六 大黒天は澤山の鼠を愛しながら、何故ベストに感染せざるや

福の神の親玉となる位なれば、金儲けに抜目なく、鼠が一疋五錢づゝになると聞いて之を飼養繁殖せしめたり、先づ牝牡二頭の鼠が例によりて月に十二疋の子を生み、それが牝牡等分として、六夫婦、翌月矢張十二疋つゝの子を生み、殖えて行く子ばかりにて左の如し。

一月の末

十二疋

二月の末

七十二疋

三月の末	四百三十二疋
四月の末	二千五百九十二疋
五月の末	一萬五千五百五十二疋
六月の末	九萬三千三百十二疋
七月の末	五十五萬九千八百七十二疋
八月の末	三百三十五萬九千二百三十二疋
九月の末	二千〇十五萬五千三百九十二疋
十月の末	一億二千〇九十三萬二千三百五十二疋
十一月の末	七億二千五百五十九萬四千百十二疋
十二月の末	四十三億五千三百五十六萬四千六百七十二疋

右は何れも其月に生れしだけの数にて、之を五錢宛にしても、十二月一ヶ月の分二億

千七百六十七萬八千二百三十三圓六十錢、此位儲かる商法は他に類無し、大黒天が財産家となりしも、鼠のお蔭ならん、併し遂にベストに罹りて往生せしかば、黒死の黒を取り大黒天と祭られしなり、生命より金の慾しき人は大黒天を學びて鼠を飼養するも宜しからん。

八七 エカイ尊者、始終尊者、澤山尊者などは、皆釋迦の御弟子なるや
是等の尊者は皆元が我利々々亡者にて、慾の火の手を焼きたる果、佛門に歸し、釋迦の御弟子となりしなり。

八八 わいゝ天王の社は何處にありや
わいゝ天王は、ごたゝ坂の下賑河岸にあり、彌次馬に向ふ見ずの飛山車を曳かせ
山車の飾物は狐に薩摩芋なり。

禽獸之部

八九 珍鴨の性質及び料理法を問ふ

珍鴨は成丈人目を忍び靜かなる土地を擇みて住む、浮かれた性質なれば、無論水鳥ならんが、どういふものか水入らずと稱す、最もこれは料理の時に水を指すを嫌ふことやも知れず、水臭ければ味の劣る由なり、さればチヨツと焼いて見るも宜しいが、チン〜と音をさせて、黒焦になれば大に味を損なふ、摘み喰ひに後腹が病めて、太鼓のやうにだんせり〜出し始末に困るものあれば、注意すべし。

九〇 鳧鴨仲間には能く歌を詠む由なれども、他にも歌を詠む鳥ありや
枝に鳴く鶯、水に住む蛙、何れか歌を詠まざらんと、古今集の序にもあれば、鶯は無論歌を詠むなり。

九一 鳥の中にて位階を有てるは五位鶯のみに候や

くひなあり、五位に比すれば四階卑しと雖も位階は位階なり。

九二 都會の人家稠密なるところにもサギ仲出甚だ多き由、其形状性質を問ふ

都會にも田舎にも、サギ仲間の繁殖近來殊に甚だし、多くは南京米の萌芽の如き鱧鱒等など生して、口吻を尖らし喋々として辯じ立つる有様、頗る利口氣に見ゆ、爪先は鉤に似て慾の深きこと限りなく、眼はキヨロ〜として脚の如し、時々天の網に罹りて窮命すれども、中々懲りず、種々の新手を考へて人を惱す、蓋し泥鼠の化けたるものならんと云へり。

九三 木兎は矢張兎の類にて獸類に入るべきものに候や

成程文字から見れば木の兎故獸類の仲間に入るべきなれども、矢張鳥類なり、例へばかはせみと云つても、蟬にあらず、あひると云つても蛙にあらず、みそざいと云つ

ても榮螺にあらす。うさぎと云つても鷲にあらざるが如し。

九四 近來濠洲より上野の動物園に持來りし動物の中にブラックスワン即ち黒き

白鳥ありとの事なるが、黒ければ黒鳥なるべきに之を白鳥とは如何

ざればサ、素人にも色の黒き人あり、赤坊にも青さめたるあり、皮相の色を以て判断すべきものにあらすサ。

九五 人間の形をしたる鳥の種類を挙げよ

先づ第一が懸鳥、相撲鳥、才鳥、人の物をただ鳥、人の亭主を寢鳥、それから月給鳥、此鳥の中には、課鳥、部鳥、市鳥、郡鳥、村鳥、校鳥、院鳥などあり、何れも八字髻などを生し、肩で風を切る、法螺を臬、晝鷲、夜鷹など澤山あり。

九六 論語に公治長の名あれども鳥の語を聞き分けたる事は少しも見えず、若し翻譯して後世に傳へなば、人間のためにも鳥のためにも、非常の便利なりし

ならん、實は公治長も之を知らざりしか、如何

イヤ公治長は諸鳥の聲を聞き分け、其意味を解したり、されども孔子論して曰く、諸鳥の語は、人間に取りて鴉の孝々、雀の忠々の外、更に無用なりと、公治長師の訓誡を奉じて、忠々孝々の外を翻譯せず、是を以て今日に傳はらざるなり、然るに今は鳥は阿呆々と鳴き、雀は痴話々と囀づるのみ、聖人の世々澆季の世とは鳥の鳴聲までが斯く變れるなり。

九七 一羽にても千鳥と云ふは如何

一羽にてもにはとりあり、四十雀あり、又鳩は九つの鳥と書く、何ぞ獨り千鳥を怪しまん。

九八 かけ鳥とは如何なる鳥ぞ

かけ鳥は帳面を以て翼となし、矢立を以て口嘴となし、サイソクくと喧ましく鳴き